

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.sgepss.org/sgepss/>

第190号 会 報 2006年12月15日

目	次
第120回秋の学会概要報告 1	第120回講演会学生発表賞報告 23
第120回総会報告 2	IAGA小委員会報告 24
会長挨拶 3	URSI分科会報告 24
会計報告 5	STPP小委員会とIHY国内委員会の活動報告 25
第24期学会役員選挙について 5	アウトリーチ部会報告 26
第237回運営委員会報告 10	男女共同参画検討提言WG報告 27
第238回運営委員会報告 12	国際学術交流事業受領者報告 上田義勝 28
評議員会報告 14	国際学術交流事業受領者報告 石坂圭吾 29
長谷川・永田賞審査報告 14	国際学術交流事業受領者報告 多田訓子 29
長谷川・永田賞を受賞して 杉浦正久 15	分科会活動報告 30
学会連合への動きの中で	関連研究集会のご案内 35
- 長谷川・永田賞を受賞して - 河野 長 16	研究助成等のご案内 36
大林奨励賞審査報告 18	関連公募のご案内 37
大林奨励賞を受賞して 高橋 太 19	学会賞・国際交流事業関係年間スケジュール 39
大林奨励賞を受賞して 能勢正仁 20	SGEPSSカレンダー 39
大林奨励賞を受賞して 三好由純 22	賛助会員リスト 40
大林奨励賞の推薦について 23	

第120回秋の学会概要報告

第120回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会は2006年11月4日(土)より11月7日(火)の4日間にわたって、相模原市産業会館・相模原市けやき会館において、開催されました。発表論文数は352件(口頭198件、ポスター154件)、参加者は422名(一般会員230名、学生会員52名、一般非会員12名、学生非会員128名)でした。口頭発表は3会場を使用して行なわれ、ポスター発表は、2日に分けて3セッションで行なわれました。また2つの特別セッション(“地上-衛星観測・データ解析・モデリングの総合型ジオスペース研究に向けて”および“地球惑星磁気圏探査：将来計画～これからを黄金の20年とするために～”)が開催されました。

第3日目の13時45分からは、相模原市産業会館において、田中館賞受賞記念講演会が開催されました。初めに第153号受賞者の藤田 茂会員が、“数値シミュレーションによる磁気圏電離圏系グローバル応答の研究”と題して、MHDプロ

セスを自己無撞着に取り扱う数値シミュレーション手法とそれを駆使したSCの研究成果について講演されました。ついで第154号受賞者の小川康雄会員が“電磁波で見た地震発生場と火山”と題して、電磁気探査手法のレビューとその地震発生場や火山への応用した研究成果について紹介しました。

引き続き、15時30分から第120回総会が開催されました。会長挨拶、長谷川・永田賞授与、大林奨励賞授与、諸報告、予算に関する議事、2006年秋学会開催地の提案、大会委員長挨拶がそれぞれ行なわれ、17時30分に閉会しました。続いて着席のまま集合写真を撮影しました。

このあと、18時から相模原市けやき会館大樹の間において、懇親会が開催されました。前澤 洵会員の司会により、本蔵義守会長の挨拶、JAXA小杉健郎研究総主幹の挨拶、向井利典大会委員長の挨拶と続いて、平尾邦雄名誉会員による乾杯のご発声をいただきました。長谷川・永田賞受賞者、田中館賞受賞者、大林奨励賞受賞者からそれぞれ手短なスピーチがありました。

大変な盛会でありましたが、阿部琢美会員の一本締めで20時に閉会となりました。

さて、この学会に関連して学術発表以外にも多くの活動が行なわれました。まず、学会開催前日の11月3日に極地研究所において、5件の発表論文の内容に関して記者発表が開催されました。その結果、齊藤昭則会員の記事が翌日複数の新聞紙で掲載されることとなりました。翌日11月4日には14時から2時間にわたり、一般講演会およびアウトリーチイベント"極限の世界からの贈り物・オーロラ ~北極・南極インターネット生中継~"が、相模原市博物館において開催されました。大変な盛況で、200人の参加を得ました。

一昨年からはじめた学生発表賞の審査も行なわれました。また、例年どおり、男女共同参画活動の一環として、学会開催中の保育所利用に対する補助も行なわれました。これらの活動は、すっかり秋学会に定着してきました。

今回の総会・講演会の運営は、宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部の大会実行委員会の方々の献身的なチームワークによって支えられたものであり、ここに厚く御礼申し上げます。

(小川康雄)

第120回総会報告

第120回総会は、相模原市産業会館多目的ホールにて、11月6日15時30分から17時30分まで開催されました。出席者は249名(総会111名、委任状138名)で、定足数227名を上回りました。総会における議事の詳細については本会報に別に記事がありますので、そちらを参照してください。

まず、前澤 洵会員の開会の辞で始まり、河野英昭運営委員が議長に指名されました。本蔵義守会長からの挨拶のあと、長谷川・永田賞が、杉浦正久会員、河野 長会員に授与されました。さらに大林奨励賞が高橋 太会員、能勢正仁会員、三好由純会員にそれぞれ授与され、会長から大林奨励賞審査報告がありました。ついで諸報告に移り、第237回および第238回運営委員会報告が小川康雄運営委員から行なわれました。このあと、学術会議関連で4件の報告がありました。まず学術会議の新体制について河野長委員から、IAGA小委員会について上出洋介会員から、URSIに関して大村善治会員から、STPP小委員会とIHY活動報告について湯元清文会員から報告がありました。ついで、EPS・JGG関連報



告が山崎俊嗣運営委員から、アウトリーチ部会報告が高橋幸弘運営委員から、男女共同参画ワーキンググループ報告が長妻 努運営委員から、それぞれ行われました。

次に定足数確認の後、議事に入りました。まず石井 守運営委員による平成17年度決算報告、岩上直幹会計監査委員による平成17年度会計監査報告が行われ、ともに承認されました。さらに、石井 守運営委員から平成18年度修正予算案および平成19年度予算案が示され、ともに承認されました。

続いて、来年度の秋季総会・講演会開催地の提案を募ったところ、齊藤昭則会員より名古屋大学が提案されました。これを受けて、小川忠彦会員から名古屋大学を会場として開催する用意のあることが述べられ、満場の拍手をもって承認されました。以上で議事を終了しました。

このあと、向井利典大会委員長から挨拶があり、最後に、前田佐和子評議員から、大会実行委員会に感謝の言葉が述べられ閉会となりました。

第120回総会議事次第

開会の辞
議長指名
会長挨拶
長谷川・永田賞授与
大林奨励賞授与
大林奨励賞審査報告
諸報告

- (1) 第237・238回運営委員会報告
- (2) 日本学術会議
 - ・体制について
 - ・IAGA 小委員会
 - ・URSI
 - ・STPP小委員会とIHY活動報告
- (3) EPS・JGG関係
- (4) アウトリーチ部会報告
- (5) 男女共同参画提言WG報告

議事

- (1) 平成17年度決算報告
- (2) 平成17年度決算会計監査
- (3) 平成18年度修正予算案
- (4) 平成19年度予算案
- (5) 来年秋季総会・講演会開催地

大会委員長挨拶

謝辞

閉会の辞 (小川康雄)

会長挨拶

第23期会長 本藏義守

始めに、第120回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会の開催をお引き受けいただき、かくも整然とまた細部にわたるまで行き届いた運営を進めてこられた向井大会委員長及び宇宙航空研究開発機構関係者に厚く御礼申し上げます。

私の挨拶に先立って悲しいお知らせでございます。去る9月3日、約5年間の闘病の末、58歳という若さで亀井豊永会員が逝去されました。

亀井会員は、昭和46年京都大学理学部卒業、昭和48年同大学院理学研究科修士課程修了後、米国海洋大気局(NOAA)に2年間滞在、京都大学理学部非常勤講師を経て、平成3年2月より、同理学部助手に着任されました。地上および人工衛星による地磁気観測データの解析的研究に取り組みれるとともに、多数の当学会員が関与した太陽地球系エネルギー国際協同研究計画(STEP)では、データ交換のための計算機ネットワーク構築に重要な役割を果たされました。亀井会員は、地磁気世界資料センター・京都の一員として地磁気データの収集・サービスにも多大な貢献をされ、特に技術的に困難であったロシア北極海沿岸部にある地磁気観測所からのデータ転送とそれを用いたAE指数、Dst指数の準リアルタイム算出の実現に中心的役割を果たされました。これらの貢献に対し、国際地球電磁気学・超高層物理学協会(IAGA)執行委員会は、本年7月、IAGA's Long Service Medal を同氏に授与することを決定しております。

このように大変活躍された亀井会員の逝去を悼み、会員一同黙禱を捧げさせていただきます。



時の経つのは速いもので、私の任期も終えようとしており、総会での最後のご挨拶となりました。ここでこれまでの2年間の当学会をとりまく状況について、改めて振り返ってみようかと思えます。

(1) 日本学術会議

会員・連携会員合わせて約2,000名からなる新しい学術会議組織ができあがり、金澤新会長のもとで本格的活動が始まっています。地球惑星科学分野では、会員・連携会員合わせて約50名からなる地球惑星科学委員会が設置され、本格的活動が始まったと伺っています。分科会組織や具体的活動については、河野学術会議会員から詳しいご紹介があります。当学会としては、今後この委員会とどのように関わるのかということが大変気になるところであります。

(2) 日本地球惑星科学連合

学術会議の改革に合わせて急遽設立された日本地球惑星科学連合(JPGU)は、設立時の24学協会から46学協会へと急速に拡大し、延べ会員約5万人を擁するまでになっています。このこと自体は望ましいことではありますが、当学会が中心となって推進しようとしてきたものの、遅々として進まなかった旧合同大会を中心とした学会連携推進の話など、今となっては遠い昔話になったとさえ思われる状況であります。もちろん、このような動きは浜野連合議長を始めとする連合執行部の献身的な活動によって支えられていることは申すまでもなく、関係者に敬意を表するものであります。

連合には多くの委員会が設置されていますが、その執行部の多くは当学会からの委員であります。この意味でも当学会は依然として連合の中心的立場にあるかと思えます。逆に言えば、当学会の貢献なくして果たして連合はその機能を十分に果たせるであろうかということでもありま

す。また、そうであればあるほど、連合の将来は当学会の将来構想に密接に関係してくるのではないかと思います。

現在の連合もいくつかの問題を抱えていると思っています。例えば、現在の運営は、個人登録者を主体とする連合大会への参加費が大きな財源となっていると理解しています。連合大会の運営だけならばこれでもよいかもしれませんが、今後さらなる活動が期待される連合の運営として果たしてこれでよいのでしょうか。また、組織についても改革が必要に思われます。議決機関として参加学会の会長からなる評議会が設置されており、現在私が議長を務めていますが、これほどの規模になるとその機能に多くは期待できないだろうと思っています。現実には運営会議とその下の常置委員会こそが連合の母体であり、これらのさらなる強化が必要だと思っています。さらに、連合の顔とも云うべき真の代表である運営会議議長という名称についても、外からは見えにくく、連合会長という名称の方が相応しいのではないかと思います。いかなる形であれ、このような問題についての連合の検討に期待したいと思います。

(3) グローバルCOEプログラム

21世紀COEプログラム終了後の新事業が目立っていましたが、概算要求新規事業が確定する前に、グローバルCOEプログラムという名称でJSPSのもとで準備が始まっています。すでに野依委員長を始めとする20名あまりの委員からなるグローバルCOEプログラム委員会が設置されています。ただし、平成19年度には地球惑星科学分野は対象とならない見込みのようです。しかし、次年度にこの分野の公募があるはずで、当学会関係者がこれまで以上にCOEプログラムに参加できることを期待したいと思います。

(4) 教員組織の改編

学校教育法の一部が改正され、大学に助教という教員が置かれることとなります。これは、現在の研究を主とする助手に対応するものであり、新たに置かれる助手とはその位置づけが異なります。当学会の助手の方々ほとんどは恐らく助教に移行することとなるかと思いますが、大学における役割が拡大し、講義の担当、学生に対する研究指導などが制度としてできることとなります。具体的対応は大学によって異なるかもしれませんが、若手研究者の方々にとって励みとなるのではないのでしょうか。

(5) 若手研究者自立支援

科学技術振興調整費による「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」がいくつかの大学で本年度から始まっています。大学によって内容は異なりますが、東工大の例では、助教をTenure track assistant professorと位置づけ、5年任期の終了時にTenure審査を行い、合格した場合は准教授（現在の助教授）又は教授に採用するという内容です。この事業の主旨は、タイトルが示すとおり若手研究者の自立を支援するというもので、独立スペース、スタートアップ資金などが準備されます。この事業を通して若手教員を支援する動きが加速することになれば、当学会にとっても大変有難いことだと思います。当学会の若手研究者は、ホームページ等を通して最新情報入手に努めていただきたいと思っています。

(6) 本学会の活動 学会運営

一昨年の秋の学会から取り入れられたコンペナー制、学生発表賞がしっかりと定着し、後者については春の学会におけるオーロラメダル授与も恒例となってきました。これらを通して多くのセッションがさらに活性化していることは大変喜ばしいことです。

アウトリーチ、男女共同参画等においても積極的に取り組んでいるところですが、別途報告がありますので、ここでは省略致します。

JAXA関連

惑星探査については本学会も深く関与していますが、これについて新しい動きがあります。宇宙航空研究開発機構(JAXA)においては、次期中期計画の一環として月惑星探査センターの新設が進められているということです。

これまで、JAXAは全国大学共同利用機関として本学会の会員を始めとするわが国の科学者の英知を結集するという、優れた組織構成をとってきたわけであり、科学ミッションの選定に当たっては、こうした科学者が参加する委員会において議論が行われてきました。こうしたやり方が科学研究の水準を高く保ち、重要な研究を取捨選択する上で大きな役割を果たしてきたところでもあります。新設される月惑星探査センターにおいても、探査計画の立案・評価・実施の全ての段階に科学者の意見が反映され、センターの意思決定にもJAXA外の科学者が参加する枠組みが維持されることを願い、運営委員会と評議員会で議論した結果、JAXAに要望書を提出

することと致しました。

将来構想

本学会の将来構想については、連合発足という新しい状況の下、検討を中断していますが、連合の姿が固まりつつあることから、できるだけ早急に再会すべきであろうと思っています。懸案の学会名称問題についても先送りのままとなっていますが、連合との関係を視野に入れた包括的解決策を追求することが重要であろうと思います。

EPS

それまでの合同大会を発展的に引き継いだ連合大会は、参加者4,000名、発表件数2,700の規模にまで大きく拡大してきました。EPSは合同大会に参加している5学会の共同事業として始まり、そのまま現在に至っています。EPSをさらに発展させるためには、連合のジャーナルへと移行すべき時期に来ているのではないかと感じています。連合大会で発表された研究成果を世界に向け自らの手で発信する必要があるのではないのでしょうか。さらに、アジア地域を視野に入れ、AOGSとの連携を考えてはどうでしょうか。

伝統ある地球電磁気・地球惑星圏学会の会長に就任し、あっという間に任期を終えようとしています。この間、当学会を取り巻く環境に大きな変化が見られたものの、運営委員の皆さんの献身的なご尽力により、大過なく学会活動を進めてこられたものと考えています。私が会長という重責を果たしてこられたとするならば、それはひとえに運営委員の皆さんのご尽力の賜であります。ここで改めて運営委員の皆さんに心より御礼申し上げます。また、会員の皆様方の暖かいご理解とご協力に対し、厚く御礼申し上げます。“日本地球惑星科学連合がさらなる発展を遂げようとしている状況にあって、当学会がアイデンティティーを保ちつつどのような将来構想をいただくべきか”という大きな課題を残したままではありますが、この点については次期の会長をはじめとする執行部に期待致したいと思います。有難うございました。

会計報告

第120回総会において、平成17年度本会計・特別会計決算および平成18年度修正予算案、平成19年度本会計予算案が承認されましたので、以下のとおりご報告します。（詳細は6～10ページの表をご参照ください）

第24期学会役員選挙について

すでにお知らせしていますが、本学会役員選挙内規に基づき、第24期役員（副会長、評議員、運営委員）の選挙を実施します。運営委員立候補については11月15日（水）に締め切り、また、選挙の公示は12月1日という日程で進んでいます。

投票〆切りは、1月12日（金）ですので、お忘れなく。

この会報がお手元に届くころには、先に選挙用紙が届いているはずですが、運営委員の立候補はあくまで投票の際の参考資料です。選挙権および被選挙権は正会員全員（一般会員、学生会員、海外会員、シニア会員）にあります。名誉会員および賛助会員には選挙権・被選挙権がありません。

平成17年度決算について

平成17年度は学会事務センターの破産問題から事務局体制を一新してスタートしました。

会費の納入体制も前年度とは大幅に変更され、銀行振込およびコンビニエンスストアでの支払の方式となりました。この影響からか、例年高率を保っていた納入率が今回は77.9%（一般会員78.2%、学生会員81.5%）と低調でした。一方で、前年度学会事務センター破綻直後に会費納入を一時期控えて頂いたこともあり、今期は前年度以前分の支払が116人分、147万3000円あり全体としては予算額を上回る会費収入になりました。

平成17年度秋期大会の盛況に伴う参加者増により、予稿集印刷代の増支および予稿集売上代大会参加費の増収がありました。全体としては496万7000円の減収となっていますが、これは出版助成金の減額によるものでありその他の収入としては増加しています。

一方支出については全体的に控えめの状況となっています。いくつか新たに展開した事業もありましたが、例えば男女共同参画事業としての託児所補助ではカンパ金の方が実際の補助金を上回りました（残金は次年度持ち越し）。また、アウトリーチ活動では科研費の利用により本会計からの支出は少なくすみました。これにより、全

地球電磁気・地球惑星圏学会

平成17年度 本会計決算書

(平成17年4月1日～平成18年3月31日)

(単位:円)

収入の部				
科 目	17年予算案	18.3.31	差異 (決算-予算)	備 考
会費収入	8,321,000	8,566,000	245,000	
正会員会費	7,190,000	7,200,000	10,000	12,000円×496名 + 昨年度以前分
学生会員会費	336,000	426,000	90,000	6,000円×44名 + 昨年度以前分
海外会員会費	168,000	192,000	24,000	6000円×23名 + 昨年度以前分
シニア会員会費	27,000	48,000	21,000	3,000円×13名
賛助会員会費	600,000	700,000	100,000	50,000円×14口
出版助成金	36,800,000	31,000,000	-5,800,000	H17年度科研費補助金
予稿集売上代	550,000	668,000	118,000	第118回総会・講演会
大会参加費	350,000	507,000	157,000	〃
JICST英文許諾使用料	40,000	80,220	40,220	平成17年度E・P・S英文許諾使用料
利子収入	5,000	8,911	3,911	
雑収入	10,000	278,661	268,661	事務センター破産和解金、託児所利用補助カンパ
小 計	46,076,000	41,108,792	-4,967,208	
前期繰越金	982,788	982,788	0	平成16年度決算額
合 計	47,058,788	42,091,580	-4,967,208	
支出の部				
科 目	17年予算案	18.3.31	差異 (決算-予算)	備 考
管理費	2,890,000	2,394,757	-495,243	
業務委託費	2,220,000	1,918,184	-301,816	(株)プロアクティブ
通信費	170,000	117,858	-52,142	会費請求書発送郵税・事務通信費 等
印刷費	150,000	150,000	0	印刷費・コピー代 等
旅 費	300,000	144,090	-155,910	運営委員会 等 旅費
雑 費	50,000	64,625	14,625	振込み手数料、外国為替手数料、WEB手数料
事業費	42,785,700	36,964,112	-5,821,588	
会誌分担金	40,195,700	34,395,700	-5,800,000	分担費3,395,700円(税込) + 出版助成金31,000,000円
許諾使用料運用支出	40,000	80,220	40,220	EPS運営委員会へ
会報印刷費	310,000	209,925	-100,075	年4回発行 + 連絡会ニュース
会報発送費	370,000	354,136	-15,864	年4回発送
大会開催費	800,000	539,177	-260,823	第118回総会・講演会
予稿集印刷代	750,000	953,400	203,400	第118回総会・講演会プログラム・予稿集印刷費
広報教育活動費	150,000	20,255	-129,745	第13回衛星設計コンテスト
学生発表賞経費	20,000	47,437	27,437	
その他	150,000	363,862	213,862	合同大会会場費、託児所補助金
基金交流事業費	300,000	300,000	0	国際交流事業費等
予備費	50,000	0	-50,000	
小 計	46,025,700	39,658,869	-6,366,831	
次期繰越金	1,033,088	2,432,711	1,399,623	
合 計	47,058,788	42,091,580	-4,967,208	

〈学会基金〉 平成18年3月31日
(単位:円)

科目	金額
当期繰入金	0
前期繰越金	12,816,404
計	12,816,404

〈田中館賞〉 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)
(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	3		
小計	3	小計	0
前期繰越金	528,819	当期収支差額	3
		次期繰越金	528,822
合計	528,822	合計	528,822

〈長谷川・永田賞〉 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)
(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	23		
小計	23	小計	0
前期繰越金	291,098	当期収支差額	23
		次期繰越金	291,121
合計	291,121	合計	291,121

〈大林奨励賞〉 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)
(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	25	メダル	75,600
小計	25	小計	75,600
前期繰越金	308,840	当期収支差額	-75,575
		次期繰越金	233,265
合計	308,865	合計	308,865

〈西田国際学術交流基金〉 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)
(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	51	派遣5件 手数料	1,020,000 840
小計	51	小計	1,020,840
前期繰越金	6,507,003	当期収支差額	-1,020,789
		次期繰越金	5,486,214
合計	6,507,054	合計	6,507,054

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成18年度 本会計予算書(修正)
(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

(単位:円)

収入の部						
科 目	18年予算案 (当初)	18年予算 (修正)	差異 (修正-当初)	10月20日 現在実績	10月20日 以降見込み	備 考
会費収入	7,994,640	7,994,640	0	4,328,000	3,666,640	会員数は5月現在
正会員会費	6,879,800	6,879,800	0	3,624,000	3,255,600	12,000円×630名×91%、納入率はH15.16年度決算の平均値を仮定
学生会員会費	304,380	304,380	0	78,000	226,380	6,000円×58名×89%、納入率はH15.16年度決算の平均値を仮定
海外会員会費	168,840	168,840	0	96,000	72,840	6,000円×42名×67%、納入率はH15年度決算の値を仮定
シニア会員会費	41,820	41,820	0	30,000	11,820	3,000円×17名×82%、納入率はH15年度決算の値を仮定
賛助会員会費	600,000	600,000	0	500,000	100,000	50,000円×12口/11社、納入率はH15年度決算の値を仮定
出版助成金	31,000,000	21,700,000	-9,300,000	0	21,700,000	H18年度出版助成金(確定)
予稿集売上代	0	0	0	0	0	第120回総会・講演会においてはCD-ROM化し参加費に含める
大会参加費	700,000	1,139,000	439,000	0	1,139,000	〃
JICST英文許諾使用料	40,000	60,000	20,000	42,840	17,160	
利子収入	1,000	1,000	0	1,890	1,224	
雑収入	50,000	50,000	0	50,086	578,622	
基金から繰入	0	0	0	0	0	
小 計	39,785,640	30,944,640	-8,841,000	4,422,816	27,102,646	
前期繰越金	2,442,161	2,442,161	0	2,442,161	0	平成17年度決算による
合 計	42,227,801	33,386,801	-8,841,000	6,864,977	27,102,646	
支出の部						
科 目	18年予算案 (当初)	18年予算 (修正)	差異 (修正-当初)	10月20日 現在実績	10月20日 以降見込み	備 考
管理費	2,972,565	3,272,565	300,000	2,038,057	1,234,508	
業務委託費	1,936,625	2,236,625	300,000	1,835,244	401,381	事務委託費1,766,625円(内クレジット機能設定費用150,000円は本年度のみ)、ホームページ管理費170,000円、会費自動振込導入300,000円(本年度のみ)
会費振込手数料	365,940	365,940	0	54,338	311,602	1件500円として計算
通信費	170,000	170,000	0	44,835	125,165	会費請求書発送郵税、事務通信費等
印刷費	150,000	150,000	0	49,000	101,000	印刷費、コピー代等
旅 費	300,000	300,000	0	19,000	281,000	運営委員会等旅費
雑 費	50,000	50,000	0	35,640	14,360	
事業費	35,780,000	27,737,000	-8,043,000	1,747,713	25,989,287	
会誌分担金	33,000,000	23,700,000	-9,300,000	0	23,700,000	分担金2,000,000円(税込)+出版助成金額21,700,000円(H18年度補助金額)
許諾使用料運用支出	40,000	40,000	0	0	40,000	E・P・S運営委員会へ
会報印刷費	310,000	310,000	0	159,663	150,337	年4号発行予定+連絡会ニュース
会報発送費	370,000	370,000	0	240,550	129,450	年4回発送(総会プログラム同封)予定
大会開催費	800,000	800,000	0	800,000	0	第120回総会・講演会
予稿集印刷代	350,000	257,000	-93,000	0	257,000	第120回総会・講演会プログラム(参考:H17年度決算95万3400円)
秋学会投稿システム	0	1,350,000	1,350,000	300,000	1,050,000	初年度(H18)導入経費35万円、運用経費年間100万円
広報教育活動費 (旧:広報活動費)	150,000	150,000	0	0	150,000	
名簿作成費	315,000	315,000	0	0	315,000	
学生発表賞経費	35,000	35,000	0	4,800	30,200	
男女共同参画経費	110,000	110,000	0	10,000	100,000	分担金2口10,000円、秋期学会託児所100,000円
その他	300,000	300,000	0	232,700	67,300	合同大会会場費等
基金交流事業費	300,000	300,000	0	0	300,000	国際交流事業費等
特別会計繰出金	500,000	500,000	0	0	500,000	長谷川・永田賞基金への繰出
予備費	50,000	50,000	0	0	50,000	
小 計	39,802,565	31,859,565	-7,743,000	3,785,770	28,073,795	
次期繰越金	2,625,236	1,527,236	-1,098,000	3,879,207	-2,351,971	
合 計	42,227,801	33,386,801	-8,841,000	7,664,977	25,721,824	

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成19年度 本会計予算書
(平成19年4月1日～平成20年3月31日)

(単位:円)

収入の部				
科 目	19年予算案	18年予算(修正後)	17年決算額	備 考
会費収入	7,994,640	7,994,640	8,566,000	会員数は5月現在
正会員会費	6,879,600	6,879,600	7,200,000	12,000円×630名×91%, 納入率はH15,16年度決算の平均値を仮定
学生会員会費	304,380	304,380	426,000	6,000円×58名×89%, 納入率はH15,16年度決算の平均値を仮定
海外会員会費	168,840	168,840	192,000	6,000円×42名×67%, 納入率はH15年度決算時の値を仮定
シニア会員会費	41,820	41,820	48,000	3,000円×17名×82%, 納入率はH15年度決算時の値を仮定
賛助会員会費	600,000	600,000	700,000	50,000円×12口/11社, 納入率はH15年度決算時の値を仮定
出版助成金	0	21,700,000	31,000,000	H19出版助成金は別会計に記載
予稿集売上代	0	0	668,000	第122回総会・講演会
大会参加費	1,139,000	1,139,000	507,000	"
JICST英文許諾使用料	80,000	60,000	80,220	平成17年度E・P・S英文許諾使用料
利子収入	5,000	1,000	8,911	
雑収入	50,000	50,000	278,661	
小 計	9,268,640	30,944,640	41,108,792	
前期繰越金	1,527,236	2,442,161	982,788	平成17年度決算による
合 計	10,795,876	33,386,801	42,091,580	
支出の部				
科 目	19年予算案	18年予算(修正後)	17年決算額	備 考
管理費	2,972,565	3,272,565	2,385,307	
業務委託費	1,936,625	2,236,625	1,908,734	事務委託費1,766,625円、ホームページ管理費170,000円
会費振込手数料	365,940	365,940	0	1件500円として計算
通信費	170,000	170,000	117,858	会費請求書発送郵税, 事務通信費 等
印刷費	150,000	150,000	150,000	印刷費, コピー代 等
旅 費	300,000	300,000	143,040	運営委員会 等 旅費
雑 費	50,000	50,000	65,675	
事業費	5,412,000	27,737,000	36,964,112	
会誌分担金	2,000,000	23,700,000	34,395,700	H19出版助成金は別会計に記載
許諾使用料運用支出	80,000	40,000	80,220	E・P・S運営委員会へ
会報印刷費	310,000	310,000	209,925	年4号発行予定+連絡会コース
会報発送費	370,000	370,000	354,136	年4回発送(総会プログラム同封)予定
大会開催費	800,000	800,000	539,177	第122回総会・講演会
秋学会投稿システム	1,257,000	1,607,000	953,400	H18年度投稿システム、予稿集印刷代から初期費用35万円を除いた額 (H17は予稿集印刷代を記載)
広報教育活動費 (旧:広報活動費)	150,000	150,000	20,255	
名簿作成費	0	315,000	0	
学生発表賞経費	35,000	35,000	47,437	
男女共同参画経費	110,000	110,000	0	分担金2口10,000円、秋期学会託児所100,000円
その他	300,000	300,000	363,862	合同大会会場費 等
基金交流事業費	300,000	300,000	300,000	国際交流事業費 等
特別会計繰出金	0	500,000	0	H18は長谷川永田賞への繰り出し
予備費	50,000	50,000	0	
小 計	8,734,565	31,859,565	39,649,419	
次期繰越金	2,061,311	1,527,236	2,442,161	
合 計	10,795,876	33,386,801	42,091,580	

平成19年度 <EPS出版助成金>

◆収支計算書

(平成19年4月1日～平成20年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
出版助成金	21,700,000	出版費用	21,700,000
小計	21,700,000	小計	21,700,000
前期繰越金	0	当期収支差額	0
		次期繰越金	0
合計	21,700,000	合計	21,700,000

体の収支としてはH17年度単期で約140万円の次期繰越金を得ました。

特別会計では、大林奨励賞で3件の受賞、西田国際学術交流基金で5件の派遣を行いました。

平成18年度修正予算について

平成18年度は前述の学会事務センター破産の影響も解消されつつあることから新事業の立ち上げが進められています。そのうちの学会費銀行自動引き落とし、ならびに秋期学会投稿システムの改訂については平成18年度予算案承認後に新たに経費が必要となったことから、これらを反映した修正予算を提出しました。加えて、既に確定している出版助成金、既に想定以上の収入を計上している英文許諾使用料については現状に即した数値に改定しました。

平成19年度予算について

平成19年度予算については、基本的に平成18年度の実績を継承する形で作成しています。記述の点での大きな変更点としては、平成17年度会計監査会での指摘事項として挙げられた出版助成金の本会計からの分離を行った点であり、これにより学会としての実質的な支出が分かり易い形になりました。

(会計担当運営委員 石井 守・山本 衛)

第237回運営委員会報告

日時：2006年8月2日(水) 13:00～17:00

場所：東京工業大学 石川台2号館315号室

出席者(敬称略)：本蔵義守、歌田久司、小川康雄、山崎俊嗣、山本 衛、石井 守、石川尚人、門倉 昭、河野英昭、関華奈子、高橋幸弘、長妻 努、中村正人、野澤悟徳

欠席者(敬称略)：臼井英之、北 和之、木戸ゆかり、齊藤昭則

議事

(1) 前回議事録承認

- ・承認した。

(2) 協賛共催関連(野澤)

- ・女子高生夏の学校の後援について報告された(メールにて承諾済み)。

(3) 入退会について(門倉)

- ・菊池弘氏の会員資格を認めた。
- ・入会者4名、退会者1名を承認した。詳細は次の通り(敬称略)。

入会者4名

正会員(一般)：小泉宜子(名古屋大学)

正会員(学生)：井上聖子(筑波大学)、

若林 誠(東北大学)、中村真帆(信州大学)

退会者1名

正会員：石田喜雄

- ・MMB入力項目とSGEPSS会員名簿掲載項目について検討した。生年月日、性別、学部等は、不必要ではないかと意見があった。生年月日は本人確認に必要、性別は統計をとるために必要等、それぞれ理由があり、残すこととした。入会時のみ、推薦者2名を入力必須項目とする方向で調整する。会員名簿記載事項について確認した。自宅住所/電話番号については、デフォルトでは非公開にすることにした。

(4) 会計関連(石井)

- ・平成17年度決算に関する会計監査を7月25日NICTにて行い、承認された。しかし、指摘事項が若干あった。会計担当が答えられないものについて、運営委員から意見がだされた。

- (5) WEBサーバー (関)
- ・ホームページはsgepss.orgに移行中。静的なページについてはほぼ完了。動的なページに関しては年内(できれば秋学会まで)に終わるよう作業を進めている。
- (6) 国際学术交流事業(小川)
- ・2件を審議し、相澤広記氏(東工大PD)の申請を採択とした。
- (7) 秋学会関連(山本)
- ・連合大会で使用しているID/パスワードを用いる件について、データベース使用に関して、JPGU、JCOMをいれた三者で協議を行った。それを踏まえ、契約を結び、使用許可を得た。現在JPGU側で契約素案を作成中。投稿締め切り8月21日、コマ割決定は25日。プログラム決定は9月12日の予定。予稿集CDの表紙について検討した。山本案を承認した。
- (8) 秋学会LOC(中村)
- ・現在の準備状況について説明があった。LOCの負担が大きいため、メーカーのブース出展はなしとした。運営委員会、評議会、総会は、それぞれ第1、2、3日目に開催予定。
- (9) 学生発表賞について(高橋)
- ・事務局はほぼ同じ体制で行う。変更は、高橋運営委員が抜けて、藤原会員が加入。中村運営委員抜けて、長谷川会員が加入。進め方は去年の方法を踏襲する。再受賞に関して、分野ごとの受賞者数(15名に1名が目安)、コンペナー推薦などについて、検討を進めている。副賞は特産品としての扱いとする。学生発表賞のための、募金を行うことにする。
- (10) 学会連大会について(中村、石川)
- ・5月の連合大会には、約4000人、45学会が参加した。参加者増などのため、700万円ほど黒字になった。事務局が手薄のため、増強する必要がある。それにより人件費が、1000万円ほど増になる見込み。各学会からの協賛金を検討している。
 - ・連合学会の評議会議長に、本蔵会長が就任した。任期は1年。
 - ・来年度の連合大会のレギュラーセッションについて確認した。8月中旬ごろから作業が開始される。レギュラーセッションについては、ほぼ現状通りで行う。「大気圏・熱圏下部と大気化学」については、昨年までの「大気圏・熱圏下部」に戻し、「大気化学」を分離する。「大気化学」について、大気化学研究会との共同提案とするかについては、後日検討する。
- (11) アウトリーチ(本蔵、高橋)
- ・リーフレット使用の凍結を解除することを決定。修正箇所については、シール貼りにて対応することにした。
 - ・アウトリーチ部会の会合は、skype(パソコンによる音声チャットソフト)を使って定期的に行っており、効果を上げている。秋学会期間中のイベントは、11月3日(金・文化の日)に記者発表を行う、11月4日(土)に講演会・質問コーナーを開催する。南極・オーロラをテーマに坂野井健・和代会員の講演を軸に昭和基地やスウェーデン同時中継によるライブショーの開催を検討している。
- (12) 学校教育(小川)
- ・学校教育WGについて。今年度の学校教育WG設立については、委員の候補があがっている。今後検討したい。
- (13) EPS, JGG関係(山崎)
- ・EPS誌の2005年のインパクトファクターが1を超えた。
 - ・EPS誌に関しての、出版社との契約については、前回の運営委員会で紹介した案に文言の若干の修正を加えて契約を行った。各学会の分担金については、金額は内定したが、覚え書きの締結に至っていない。
 - ・JGGバックナンバーの電子ファイル化作業について。5月末期限で、著作権が当学会に所属すると見做すことについて異議受付を行ったところ、異議は出ず、著作権の問題はクリアされたと考える。JSTが、8月末から9月にスキャン作業に入り、今年度末ごろまでに公開まで持っていく予定。

(14) 男女共同参画関係(長妻)
・任期付研究職問題について。アンケート調査の中身の検討を、ワーキンググループメンバーと有志で進めている。9月ごろから調査を開始する予定。WEBを用いたアンケート調査を予定している。

(15) JAXA月惑星探査センターに対する学会の対応について(中村)

・JAXA月惑星探査センターに関して、とりまく状況について、資料に基づき説明した。2008年から設置の予定。「共同利用機関としてのファンクションができるか」、「これまでのような競争原理が大事であること」などに関して学会から意見表明する必要がある。学会で、文科省とJAXA理事長に対して、提言をだすことにした。まずはワーキングメンバー(高橋、関、山本各運営委員)にて、原案を検討する。

(16) 会報発行予定(河野): 省略

(17) 来年度の秋学会の候補(小川)

・来年の開催地について、意見交換を行った。

(18) その他

今後の予定について確認した。

・名簿作成、修正予算策定、選挙(副会長、評議員、運営委員)が予定されている。

(他省略)

(野澤悟徳)

第238回運営委員会報告

日時: 2006年11月4日(土) 18:00~20:15

場所: 相模原市産業会館 4F 国際商談室

出席者(敬称略): 本蔵義守、歌田久司、小川康雄、山崎俊嗣、山本 衛、石井 守、石川尚人、門倉 昭、河野英昭、関華奈子、高橋幸弘、長妻 努、中村正人、野澤悟徳、臼井英之、北 和之、木戸ゆかり、齊藤昭則

議事

(1) 前回議事録承認

・承認した。

(2) 共催、協賛等(野澤)

以下のシンポジウム等の共催・協賛を承認した。

後援「第18回研究成果発表会」(主催: 海洋調査技術学会)、日時: 平成18年11月9日(木)~10日(金)、場所: 海上保安庁海洋情報部会議室(東京都中央区築地5-3-1)。

協賛「第17回大気化学シンポジウム」(主催: 大気化学研究会・名古屋大学太陽地球環境研究所)、日時: 平成19年1月10日(水)~12日(金)、場所: 豊川市民プラザ(PRI0 II ビル4階)。

共催「CAWSES (Climate and Weather of the Sun-Earth System)に関する国際シンポジウム」(主催: 京都大学生存圏研究所他)、日時: 平成19年10月23日(火)~27日(土)、場所: 京都大学時計台ホール。

共催「赤道大気上下結合国際シンポジウム」(主催: 科研費(特定領域研究)「赤道大気上下結合」総括班)、日時: 平成19年3月20日(火)~23日(金)、場所: 京都大学百周年時計台記念館。

(3) 入退会(門倉)

入会者8名、退会者5名を承認した。詳細は次の通り(敬称略)。

入会者8名

正会員(一般)4名: 三好隆博(広島大学大学院理学研究科)、山川 宏(京都大学生存圏研究所)、根建心具(鹿児島大学理学部)、田中健太郎(宇宙航空研究開発機構)

正会員(学生)3名: 古賀康泰(鹿児島大学大学院理工学研究科)、石井聖子(鹿児島大学理学部)、西岡未知(京都大学理学研究科)

正会員(海外)1名: Okeke Francisca Nneka (University of Nigeria)

退会者5名

正会員(一般)4名: 千葉光史、亀井豊永、牧野行雄、川平浩二

海外会員1名: 香西和子

(4) 会計関係(石井)

・平成17年度決算報告および会計監査について: 会計監査の指摘にたいする対応を説明。

・平成19年度予算案について: 出版助成金の扱いについて議論し、監査委員会からの指摘に従い、本会計から外すことにした。

・平成18年度修正予算案について: 新規秋学会投稿システムの導入・学会費自動引き落

としシステム導入など新規事業による修正を行うとともに、既に確定している出版助成金等の金額を改めた。また、会費の納入率が低い（一般正会員が52%、学生会員が25%）ことが指摘された。

(5) 海外学術申請（小川）

- ・3件の応募があり、議論の結果、三宅壮聡会員の申請を採択とした。

(6) EPS・JGG関連（山崎）

- ・予算執行調査について：財務省による予算執行調査を受けた。来年度から会計監査を行うこととしたい。
- ・科研費申請について：来年度の申請から、自助努力が求められ、収入と同額が申請の上限となる。EPSの場合、機関講読、各学会からの分担金や別刷り代等での収入は、1700万円程度。この額以下にて、現在科学研究費（研究成果公開促進費）書類を準備中。
- ・EPSの運営について：上記した理由により、EPSの収入が減額する。そのための対策を検討中。例えば、購読額について、大口ユーザーに関しては、高めの料金を設定する、現在カラーページ2ページを無料にしているが、来年度からは、同じ図を電子版はカラー、冊子体は白黒とできるようにして、電子版のカラー2ページのみ無料とし、冊子体でのカラーは有料とすること、などを検討している。
- ・JGGのデジタル作業について：秋口からスキャンを開始する予定であったが、JSTの作業が遅れている。作業開始のめどがまだたっていない。すでに出版社でスキャン済みの1980年代までは今年度中に公開できる見込み。近く、JSTと覚書をとりかわす予定。

(7) 連合関連（石川、北、中村）

- ・新規参加学会について：来年度から大気化学研究会が正式参加する。
- ・レギュラーセッション：当学会に関連するレギュラーセッションは変わっていない。
- ・法人化について：連合学会に法人化の動きがある。現在46学会、53,000名程度で構成されている。この規模だと、社会的認知を受ける必要があると思われる。法人には、2種類あり、一般法人、公益法人がある。ここ1年ぐらいで準備し、まずは、一般法人

になることを目指す。その後、公益法人を目指す。なお、学会が正会員となる（個人ではない）。

(8) 男女共同参画（木戸、長妻）

- 男女共同参画学協会連絡会の活動について
- ・地球惑星科学連合が、学協会連絡会に正式加盟（7月の連絡会にて承認）
- ・女子高校生夏の学校（第二回8月17日～19日）にSGEPSSが後援学会として参加。企画運営への協力、院生の講演、学会のポスター紹介等を実施。女子理系進学支援事業開始（いずれも、独立行政法人国立女性教育会館（NVEC）にて）。
- ・第4回シンポジウム開催（10月6日山上会館にて）、合同～連合大会における学会託児室の経緯についてのポスター発表を行った。
- ・第4回のシンポジウムの終了に伴い、幹事学会が交代した。現在第5期。（日本分子生物学会 -> 生物物理学会）
 - 大学・研究機関における有期限雇用の研究職に関するアンケート調査について
- ・現在アンケート受付中（11月5日現在、121件）。年度内に集計し、連合大会のユニオンセッションにて、発表予定。
 - 秋学会での保育室準備および利用状況
- ・11月5日終日、2家族が利用した。

(9) アウトリーチ（高橋、北）

- ・記者発表について：11月3日、国立極地研究所において、5件の記者発表を行った。3大紙を含む、7社8名が参加。
- ・一般講演会について：11月4日、午後2時から4時まで。テーマはオーロラ。いろいろな年齢層の200名近くが参加。
- ・科研費について：申請の準備をしている。
- ・学校教育ワーキングについて：高校地学の項目提案のための小冊子作成準備。

(10) webサーバー（臼井）

- ・京都大学にあったwebサーバーが外部に出た。メイリングリストも移行済み。
- ・メイリングリスト sgepssall@sgepss.org は、運営委員会から全会員への連絡用であり、運営委員からの投稿のみ受け付ける。一方、sgepssbb@sgepss.org は会員相互間の情報交換用であり、一般会員からの投稿ができる。

- (11) 秋学会について (中村、山本、関、石川)
- ・投稿システムについて：新しい投稿システムは順調であった。今回の学会は、いつものところ順調に進んでいる。
 - ・参加登録料について：名誉会員は無料。
- (12) 2007年秋学会候補地提案(野澤)
- ・来年度秋学会開催地について検討した。
- (13) JAXAへの要望書について(山本、高橋、関、中村)
- ・月探査センターの新設に関わる要望書について：ほぼ完成。
- (14) 選挙の準備状況(野澤、小川)
- ・日程について：11月15日運営委員会立候補締め切り。選挙案内(選挙公示)は、12月1日までに届くようにする。2007年1月12日(金)投票締め切り。
- (15) 名簿の準備状況(門倉)
- ・名簿掲載追加について：学生発表賞、EPS賞受賞者(本学会会員のみ)を掲載する。来年2月ごろ完成がめど。
- (16) 会報の発行予定(河野、北)：省略
- (17) その他
- ・日本学術会議 I A G A 小委員会について(歌田)：小委員会が設置され、メンバーが決まった。上出洋介(委員長)、家森俊彦(幹事)、歌田久司、山崎俊嗣、山本衛、藤本正樹、小島正宜、藤井郁子の各会員。(野澤悟徳)

評議員会報告

日時：2006年11月5日(日) 18:00~20:15

場所：相模原市産業会館 4F 国際商談室

出席者(敬称略)：家森俊彦、歌田久司、浜野洋三、深尾昌一郎、藤井良一、本蔵義守、前田佐和子、向井利典、湯元清文

議事

(1) 運営委員会報告

小川運営委員(総務担当)より、第235回及び236回運営委員会の審議状況について説明があった後、アウトリーチ活動(とくに高校地学関連、記者発表)、男女共同参画委員会による有期限雇用問題のアンケート、IGY50

年記念関連事業などについて意見交換を行った。

(2) 田中館賞推薦ヒアリング

1件の推薦につき、推薦人から推薦理由について説明があった後、質疑応答があった。

(3) 田中館賞審査

1名の候補者について業績等に基づき審議した後、候補者について可否投票を行った結果、この候補者に田中館賞を授与することとした。

(4) JAXA月惑星探査センターに関する要望書について

運営委員会で作成した要望書原案に基づき議論した。現在の状況が必ずしも明らかでないこと、要望書の内容が明確になっていないことなどの意見があり、運営委員会でさらに検討してもらった上で再度検討することとした。

(5) EPSについて

EPSの今後の発展を図る方策について意見交換を行った。EPSは5学会の共同出版としているが、EPSのスコープとしては現在の地球惑星物理系を中心とする立場は堅持するという条件で、AOGSの参加を検討してはどうかとの意見があった。

(6) 謝辞について

総会における大会委員長及びJAXA関係者に対する謝辞は、前田評議員が担当することとした。

(本蔵義守)

長谷川・永田賞審査報告

第26号受賞者 杉浦正久 会員

杉浦正久会員は長年にわたって、地球磁気圏電離圏の研究分野において多くの業績を挙げてこられた。磁気嵐の形態学的・統計的研究に加え、ダイナミクスエクスプローラ衛星等多くの人工衛星の磁場観測を担当され、その観測結果から地球磁気圏界面、地球磁気圏の磁場構造および磁気圏磁場・電流系の擾乱現象の解明など特筆すべき成果を得られると共に、我が国の多くの若手研究者を米国に招聘されるなど後進の育成に努めてこられた。また同会員が発案されたDstおよびAE指数は磁場擾乱の指標として電離圏・磁気圏研究では不可欠のものとなっている。さらに、国際地球電磁気学・超高層物理学協会執行委員を務められる等数々の国際的貢献を果たされ、日本のデータセンターの国際的な地位向上にも寄

与された。国内においては、本学会の第14期評議員を始めとして、日本学術会議地球電磁気学研究連絡委員会委員長などの要職に就かれ、本分野の発展に尽くされた。特にデータ流通の促進においては、SPANネットワークの日本への接続に尽力され、現在のインターネットの礎として広く我が国の科学技術の発展に大きく貢献された。

これらの地球電磁気・地球惑星圏科学における功績と功労を高く評価し、評議員会の審査と議を経て、杉浦正久会員に長谷川・永田賞を授与することとした。

第27号受賞者 河野 長 会員

河野 長会員は、長年に渡り古地磁気学分野において数多くの業績をあげてこられた。岩石の残留磁化により過去の地球磁場強度を測定できることを世界で初めて示して古地球磁場強度研究の基盤を築き、古地磁気学的データとダイナモ理論の結合という新たな研究分野を進展させるなど、地磁気復元および地磁気起源に関する先進的な研究は高く評価されている。また、ヒマラヤ山脈の重力測定を行いアイソスタシーが成立していないことを初めて実証するなど、地球物理学において幅広く業績をあげてこられた。また、国際地球電磁気学・超高層大気物理学協会、国際測地学・地球物理学連合の会長を歴任するなど国際的リーダーシップを発揮され、国際的な研究発展に多大な貢献をされた。国内学術行政においても、学術会議会員、学術審議会委員など学術の振興に努められた。本学会においては、運営委員、評議員、第19期会長を歴任されて、学会運営の充実向上と後進の育成にもご尽力されてこられた。

これらの地球電磁気・地球惑星圏科学における功績と功労を高く評価し、評議員会の審査と議を経て、河野 長会員に長谷川・永田賞を授与することとした。

(本蔵義守)

長谷川・永田賞を受賞して

杉浦正久

この度、名誉ある長谷川・永田賞をいただき、誠に有難く光栄に存じます。

私が仕事をすることについては多くの方々のお世話になりました。そのことについて少し書いて



みたいと思います。

永田先生には地球電磁気学を学びましたが、戦時中教室が一時、信州・岩村田に疎開した際に電磁気学の基礎をしっかりと植えつけられました。また、坪井忠二先生からは科学の基礎を学びました。

大学院在学中の1952年 米国アラスカ大学地球物理学研究所から招聘されて渡米、同研究所に奉職し、所長のC.T. Elvey教授、そして私の師であるSydney Chapman教授から研究の上で深い薫陶を受けました。Chapman教授は当時オックスフォード大学を引退されアラスカ大学に赴任してこられることになっていました。私の仕事は IAGAに密接な関係のあるもので地球磁気圏に関するChapman先生の仕事に深く刺激され、多くの時間を磁気圏の研究に費やしました。かなりの時間と労力の末、Dst 指数に行きつきました。AE指数は Dst 指数の延長だと思えます。

1959年、アラスカ大学在勤中に、Guggenheim Memorial FoundationのFellow(名誉研究員)に選ばれました。このことは私のキャリアで一つの大きなキーポイントになりました。

Guggenheim Fellowshipは私の場合、一年間自由にどこで何の研究をしてもよいというものでしたが、私は英国ケンブリッジ大学の客員として半年間席をおき、その間ヨーロッパ各国の大学や研究所をまわり、ことにスウェーデンのキルナにある研究所で二週間過ごしたことはのちの研究生活に大きな影響を及ぼしました。

また、Washington D.C.にあるDepartment of Terrestrial Magnetism (DTM) というカーネギー財団の研究所で度々仕事をし、Marl A. Tuve所長やE. Harry Vestineには非常に有用なことを多く教えられました。AGUとはその頃から絶えず接点がありました。

1962年、アラスカ大学教授に任命されると同時にアラスカ大学を退官、NASA Goddard

Space Flight Centerに移り(1962~1985)、Washington D.C.郊外に居を移しました。その頃 永田先生は毎年ある期間、仕事の関係でピッツバーグで過ごされて居りましたが、先生とは学問とはまた別に色々ユニークなお付き合いがありました。先生は所要でワシントンに来られるときは、いつも拙宅にも寄られていましたが(その年私は先生御夫妻の御媒酌で結婚をしておりました)あるとき、何らかの理由で(確かホテルがとれなかった)私宅に二泊されたことがありました。二日目の夕、先生は我が家の厨房に入られ、自ら包丁を握られ、永田流すきやきを作り、家族にご馳走してくださいました。永田流すきやきとは、砂糖を一切使わず、玉葱から自然の甘味を引き出すというもので、先生の味付けは絶品でした。これは永田先生独特の一種のエンターテインメント精神であり、他人に気を配られる先生的一面でもあります。

話は前後しますが、Chapman先生は弟子を非常に大切にされる方でした。先生の弟子の数が少ないのはそのためです。先生はpupilとstudentをはっきり区別され、私が先生のpupilになれたことは大変光栄なことでした。何事にも厳格な先生に対し、夫人は大変心優しい方でした。当時 既にアラスカを離れ、ワシントン郊外に住んでいた我が家に娘が生まれたとき、夫人はわざわざイギリスに服を注文し、お祝いにドレスを送ってくださいました。これは多分 祖国を離れ、外国で暮らす我々に寂しい思いをさせぬようにとの先生御夫妻の温かいお心遣いであったと思います。

アラスカにいたことは私にとり研究面以外にも大きな影響がありました。アラスカに行き、自然というものの偉大さを知ったからです。

1985年、京都大学から招聘を受け、熟慮の末、帰国しました。そして京都でもまた多くの人との交流を通じ、意義有る仕事が出来たことは誠に感謝にたえません。京都大学のデータセンターについても多くの人の世話になりました。特に、今は亡き亀井豊永君には、データに関しての技術的なことは彼に頼り、全てを任せました。ご冥福を祈り、そして心から感謝し、御礼を申し述べたいと思います。

亀井君、そしてそのあとを継いだ家森君がその方面で活躍されていることを大変嬉しく思います。データを取り扱うものにとって、データを大切に考えることは非常に重要なことです。

Van Allen教授はデータを非常に大切にする人でした。Van Allen帯を発見した当時(1958

年)、私が送ったデータを何十年も後になって、再度データを要求されたのには驚きました。当時、私は既に長いアメリカ生活に区切りをつけて帰国し、数年経った後のことでした。そのときにいただいた彼の自筆の手紙は今も大切に持っております。

こうして考えてみると、私の人生は多くの人からたくさんの影響を受け、助けられたものであります。これら全てのことを今 改めて考え感無量であります。

最後に、受賞にあたり、私をサポートして下さった方々に厚く感謝し、心から御礼を申し述べます。

地球電磁気、地球惑星圏学会の益々の発展を祈ります。

学会連合への動きの中で - 長谷川・永田賞を受賞して -

河野 長

このたびはこの名誉ある賞をいただき、身に余る光栄と感謝しております。

運営委員の方からこの賞のことをご連絡いただいたときは正直いってびっくりした。私の業績といっても大したものではないし、学会に対する貢献も賞に値するほどのものは思いつかない。でも考えてみると、今日の学会連合に至った変革の中で、しばしば現場に近いところで立ち会った経験がある。この賞はそのこと評価していただいたのではないだろうか。でもそれならそこにいたのは私だけではなかった。そのことをこの機会に少し思い出してみたい。

そもそもの始まりは、AGUが西太平洋地域で学会を開こうと構想した頃に求められよう。AGUは第1回(1990年)を日本で開こうと持ちかけてきたが、当時日本にはAGUに対応できるような地球



物理学全体の組織など何もなかった。そこでSGEPSS会長であった木村磐根先生が各学会に呼びかけて、連合してAGUと交渉することになった。このWPGMは1990年に金沢で成功裏に開催されて、複数の学会が共同で事業を行うさきがけとなった。このときの木村会長のイニシアティブの意義は今日から見ても極めて大きい。

このWPGMの運営に関わった若手のグループは、本蔵義守さんを中心としてその後「連絡会」という組織を作るが、これこそが地球惑星科学の「合同大会」を強力に推進した中核部隊だった。私は、当時たまたま本蔵さんと同じ職場にいたために、この記念すべき第1回の合同大会（正式名称は地球惑星科学関連学会1990年合同大会）を東工大で引き受けて開催するという現場に立ち会うことになった。

合同大会の成功は次に学会誌の統合へ進んだ。従来日本地震学会など3学会で発行していたJournal of Physics of the EarthとSGEPSSのJournal of Geomagnetism and Geoelectricityが統合されて1998年からEarth、Planets and Spaceになった。この統合を強力に推進されたのが国分征会長と本蔵さんだった。私は最後のJGG編集長としてEPSの本蔵初代編集長に引き継いでいただき、時代が変わったのを思い出す。

その後東大に移ってもう一度合同大会を大会委員長として開く巡り合わせになった。このころには大会の規模が大きくなり、それまでのように大学の講義室を利用するなどのやり方では講演会場が足りなくなってしまった。代わりを捜すのに幾分苦労したが、科学博物館におられた齋藤靖二さんのご尽力で、国立オリンピック記念青少年総合センターに会場を設定することができた。この大会（第9回、1998年）を運営するために中心となって活動されたのは、寺沢敏夫、中村正人、岩上直幹の各氏であった。この大会のために開発されたさまざまなシステム（ウェブ投稿方式、大判のプログラム、会計方式など）は、それ以後の合同大会に引き継がれて改良され、今日の連合大会まで続いている。この大会以後、オリンピック記念センター（2001年まで）、幕張メッセ（2002年以降）と大きな会場で開く方式が固まった。

合同大会の規模は年々大きくなり、2000年の九州大学を最後として一大学のグループが開催を引き受けるという仕組みが不可能になった。巨大化しそのサイズ自体が問題の種となったわけだが、この窮状を救ったのは浜野洋三さんを中心とする東大のグループだった。彼らは他大学が

らのボランティアも含めて「地球惑星科学合同大会運営機構事務局」を結成し、2001年からの合同大会を開催してきた。これが母体となって昨年「日本地球惑星科学連合」が結成されたことは記憶に新しい。今年からは合同大会は連合大会となり、参加学会数は46、会員総数は4万人を超えるという大組織になった。この連合の活動も浜野代表をはじめとして当学会会員の方々の活躍が著しいが、それだけでなく他の学会に基盤を持つ多くの人たちが力を尽くして働いておられる。

連合がかくも短い時間に大きくなったのは、西田篤弘さんの努力によるところが大きい。西田さんは18期、19期の学術会議会員として、地球惑星科学は学会が分立したままでは学術会議から相手にされなくなる危険があると説かれた。実際昨年発足した20期では、学術会議は各分野で学会の連合を推奨しており、すでにこうした組織が歯学、心理学など複数の分野で結成されている。これに対する私のささやかな貢献は、SGEPSS会長だったとき（1997年?）、松野太郎気象学会理事長、石田瑞穂地震学会会長と協力して「地球惑星科学関連学会学会長等懇談会」をスタートさせたことであろうか。ちなみにこれは現在の「日本地球惑星科学連合評議員会」の母体であるといつて良い。また、2003年に札幌で開かれたIUGG総会は地球科学系の学会にさらなる協同の雰囲気を作るのに役立ったかもしれない。もっともこの総会の開催に最も貢献されたのは、上田誠也さんを始めとするLOCの方たちであるが。

というようなことで、この二十年たらずの期間ずいぶん学会連合に連なる発展があったが、どういふ訳か私はその現場近くで事態の推移を見ることが多かった。こうしたことを学会が考慮されて今回の受賞に至ったとすれば、個人的には大変ありがたいことであるが、他にも多くの方々が積極的に事態を動かしてきたことを忘れてはならないだろう。学会に対する感謝の念を表すとともに、こうした事情を皆様方にも思い出していただきたく、この文を記した。

大林奨励賞審査報告

第23号 高橋 太 会員

「準テイラー状態の地球ダイナモの研究」

近年、スーパーコンピューターを用いた回転球殻内における3次元非線形ダイナモの研究は長足の進歩を遂げた。これまで提唱されてきたモデルに共通することは、自転軸と平行に柱状の対流セルが発生し、その結果生じる磁場は双極子磁場に近く、実際の地磁気のように極性の逆転も起きることである。しかし、高橋会員は、コンピューターの能力の限界から、モデルで仮定するパラメーターが実際の地球核内における状態からは非常に離れたものとならざるを得ないという難点を克服すべく、独自の研究を進めてきた。

高橋会員は、タンジェントシリンダ(TC)とよばれる自転軸に平行で内核に接する円筒が果たす役割にまず着目した。レイリー数(Ra)が臨界値の8倍程度以上ではTCの内側でプリューム状の流れが生じるものの、こうした流れは時間的にも空間的にも激しく変化するために、ポロイダル磁場は十分には成長しないこと、そしてTC内側の磁場生成率はTC外側よりも数倍小さいことを示した。また、TC内外の磁場生成率が同程度の場合は、地磁気逆転などの遷移期に対応する可能性を示した。

次に、Raについてその臨界値の53倍までの依存性を調べ、対流と磁場の構造により、ダイナモは低Ra、中Ra、高Raに分けられことを示した。低Raダイナモでは、TC外側の柱状対流セルで特徴付けられる流れにより、主として双極子磁場が生成されること、中Raダイナモでは、TC内側でも対流が生じ始めるが、磁場生成効率が低下しつつは磁場が維持されなくなること、高RaダイナモではTC内側の対流が支配的になり、磁場は維持されるがそのエネルギーは運動エネルギーを下回ること、などを明らかにした。さらに、これらのダイナモの違いが磁場と速度場の散逸スケールの違いによって説明できることを示した。

その後高橋会員は、地球シミュレータを使用して、現実の地球核内の力学的状態に近いモデルの数値計算に着手した。地球シミュレータ用の計算コードを開発することによって、キー・パラメータであるエクマン数が 10^{-6} という今までにない低い値での数値計算に成功し、高解像度、低粘性の準テイラー状態にあるダイナモを世界で初めて実現した。重要なことは、時間的そして空

間的な特徴だけでなく、ダイナモにおいても地球ダイナモの特徴を示すモデルが初めて得られたという点にある。また、双極子磁場が安定な期間と磁場逆転が発生する遷移期間における磁場の特徴を解明し、磁場の極性逆転は「高緯度にある磁束斑が極方向へ移動して消え、低・中緯度にあった逆極性の磁束斑が極方向へ移動する」というプロセスで起こることを示した。この研究成果は高い評価を受けており、*Science*のNews of the Weekや*Physics Today*のPhysics Updateで紹介され、日本の新聞紙上でも取り上げられた。

高橋会員は2005年A0GSでの水星ダイナモについての招待講演、科学未来館での一般向けライブトークScience Edgeへの出演など、幅広く活動しており、日本の固体地球惑星電磁気学の将来を担う若手研究者の一人として今後の活躍が期待される。

以上の理由により、本学会は高橋 太会員に大林奨励賞を授与することとした。

第24号 能勢正仁 会員

「ウェーブレット関数を用いたPi2脈動の自動検出手法の開発とその応用研究」

地磁気脈動は長い歴史のある研究分野である。とくに、Pi2脈動はサブストームと密接に関連して発生する現象であり、磁気圏の物理を理解する上で重要な現象である。しかし、その発生メカニズムについては未解決の問題が多く残されている。これまでは数10例程度の事例を抽出しての研究が一般的であり、統計精度の向上が必要とされている。

能勢会員は、この問題を解決する新たな解析手法の開発に取り組み、Pi2脈動の自動検出についてウェーブレット関数を応用したアルゴリズムを開発・実用化することに世界で初めて成功した。京都大学峰山地磁気観測点における1994年から1996年までの20ヶ月間の水平(H)並びに偏角(D)成分の地磁気データから、約2000例のPi2脈動を自動抽出した。本手法による検出率は、昼間側で26.5%、夜側で83.4%であり、とくに真夜中の20-02磁気地方時では93.2%という高い検出率となっている。自動検出したPi2脈動のデータから、従来にない客観性と精度をもってPi2脈動のグローバルな統計分布を導き、その発生メカニズムについて精密な議論をすることが可能となった。

磁気地方時依存性については、正午付近を境に右旋から左旋に偏波が変わること、夜から昼にか

けて振幅は減少し、正午付近で再び振幅が増大することを見いだした。振幅と偏波の統計的描像から、Pi2脈動は空洞共鳴モードであることを強く示唆する結論を得た。さらに、能勢会員は、ETS-VIやEXOS-D衛星によるその場観測と地上多点観測点の同時観測データから、空洞共鳴モードによる振動として矛盾が無いことを検証した。

能勢会員は、これらの研究過程で作成したPi2脈動のイベントリストや、開発したPi2脈動の自動検出アルゴリズムを国内外の研究者・研究機関に積極的に提供して、自らの研究の幅を広げると共にこの研究分野の発展に貢献している。リアルタイムPi2脈動検出を目的として開発された手法は柿岡地磁気観測所をはじめ、英国、ドイツ、メキシコ、米国などで使われている。自動検出したデータは、Webを通じて実時間データとして公開されている。また、Pi2指数とも呼ぶべきサブストーム発生の指数も開発中であり、共同研究を広く進めることで、学界の発展に大きく貢献している。さらに、能勢会員は、Pi2脈動の研究に留まらず、サブストームに伴うイオン加速や近年注目されている磁気圏内イオン組成変化の研究へと自身の研究にも広がりを見せており、研究成果を出しつつある。

以上の理由により、本学会は能勢正仁会員に大林奨励賞を授与することとした。

第25号 三好由純 会員

「地球磁気圏放射線帯の形成過程に関する研究」

磁気嵐時に放射線帯外帯粒子の増加・加速を引き起こすプロセスとして、断熱輸送に伴う加速が支配的とされてきた。しかし、1990年代後半から非断熱加速の可能性が理論的に注目されるようになり、どちらのプロセスが重要かについて議論が続いている。三好会員は、複数の衛星のデータを用いることで、内部加速が実際に起きていること、内部加速のプロセスとして波動による非断熱加速が発動していることを、エネルギー粒子、波動、プラズマ密度といった観測データを総合的に解析することで、はじめて実証的に示し、放射線帯外帯の形成過程に関わる新たなシナリオを提示した。また、実際の衛星観測の状況に即した数値計算を行い、観測された現象が断熱加速だけでは外帯の増加過程を説明することができないこと、及び波動による非断熱加速過程が重要であることを明らかにした。

放射線帯は磁気嵐時に大きく変動するが、約

半数の磁気嵐では外帯は増大しないことが知られている。どのような磁気嵐の時に増大するかは未解明の重要な課題である。三好会員は、磁気嵐ドライバーソースの違いに注目し、第23太陽活動期のDst<-100nTのすべての磁気嵐についてドライバーソースと放射線帯変動の解析を行った。その結果、放射線帯は磁気嵐の大きさではなく、太陽風のドライバーソースによって変動が支配されていることをはじめ明らかにし、外帯はCIR駆動磁気嵐時に、スロット領域と内帯はCME駆動磁気嵐時に、それぞれ増大することを定量的に示した。

三好会員は、宇宙天気研究分野の中で最も注目される領域の一つである放射線帯について、粒子の加速・輸送過程、さらにその供給源を追究し続けている。とくに、観測データに基づいて現象の本質を引き出す解析と、それをもとに物理的プロセスを計算機シミュレーションによって検証していく手法で卓抜な才能を発揮し、国際的に高い評価を受ける成果を挙げ、この分野の研究に大きく貢献している。日本の太陽地球系物理学の将来を担う若手研究者の一人として今後の活動が大いに期待される。

以上の理由により、本学会は三好由純会員に大林奨励賞を授与することとした。

(本蔵義守)

大林奨励賞を受賞して

東京工業大学 高橋 太

この度は、地球電磁気・地球惑星圏学会より大林奨励賞という名誉ある賞を賜り、真に光栄に存じます。これまでに御指導・御鞭撻頂きました全ての方々に感謝いたします。特に、学生



時代から今日に至るまで御指導いただいている東京工業大学の本蔵義守先生、綱川秀夫先生、松島政貴助手、JAXA宇宙科学研究本部時代に御世話になりました向井利典先生、そして地球シミュレータの使用に際してお世話になりました東京大学の浜野洋三先生に深く感謝いたします。今回受賞の対象となりました研究の多くは、私の博士論文研究が元になっています。そうした点では、学生時代に御指導頂いた本蔵先生からSGEPSS会長として賞を授与された事に対しては大きな感慨を覚える次第です。

私にとって最も幸運だったことは、博士課程2年の夏に地球シミュレータを利用できる環境にいたことです。このことによって、思い切って地球シミュレータ用コードをゼロから開発しようという気になりました。コード開発には慣れていたものの、新たなものを作り出すにはやはり時間が掛かりました。その結果、約半年かけて開発したコードが地球シミュレータ上で予想以上の性能を出したときには、そのあまりの速さに感動を覚えました。強力な武器を手にした私は、勇んでダイナモシミュレーションに挑みました。目標は現実の地球のコアの物性により近い、より粘性の低い状態でシミュレーションを行うことでした。今までに到達したことのないパラメータ領域でのダイナモシミュレーションはまさに手探り状態で、地球シミュレータを持ってしても相当な時間を要しました。幸いなことに、これまでの経験からダイナモを研究するのに相応の忍耐というものが自分に備わっていたようで、なんとか新しい結果を得ることができました。

その結果、無事に学位を得た私は、JAXA宇宙科学研究本部に移り、地球ダイナモの研究を引き続き行いました。当時私が行っていたダイナモシミュレーションは海外の他の研究グループに比べて一桁以上粘性が低いものでしたが、論文として出すにはもっとインパクトが欲しいと考えていました。そんな折、本蔵先生から「シミュレーションが漸近的に地球のコアと同じような状況にあることを示せないか？」という助言を受けました。これは我々を始めとするダイナモシミュレーションで地磁気を研究する者にとっては究極の目標の一つとも言うべきものです。しかし、具体的にどうすればそれを示せるのか？という疑問に日々頭を悩ませることとなりました。思案の末に辿り着いたのがテイラーの制約条件でした。この条件自体は古くから知られていて、地球のコアは準テイラー状態という状態にあると考えられ

ていました。方針も決まり、計算結果を解析して得られた結果は、期待通りに準テイラー状態を示すもので、予想以上に大きな成果となりました。ここまで到達するのに二年近くの時間を要したこともあり、ポストクの立場としては早く論文として出したい気持ちもありましたが、結果的には本蔵先生から常々言われてきた「大変でも大切だと思うことはしっかりとやるべきだ」との教えが正解でした。安易な単純化は本当に重要な物理を見落とす危険性がある。何をすることが目的とする物理を捉えるために必要なかをよく考えなさい、という意味と理解しています。この教えは、私の研究に対する基本的な姿勢でもあります。

現在ダイナモシミュレーションは新たな展開を見せ、地球以外の惑星磁場にその対象を拡げつつあります。私もJAXA宇宙科学研究本部にいた時分に水星磁場の研究を行い、その可能性を大いに認識しました。今後も微力ながら、地球惑星深部のダイナミクスの理解を深める努力をしていく所存です。今後ともSGEPSSの諸先輩方からの御指導をよろしく賜りたいと存じます。

大林奨励賞を受賞して

京都大学 能勢正仁

大学院生時代から続けて参りました地磁気脈動に関する研究について大林奨励賞を賜り、身に余る光栄に存じます。これまでに多大なるお力添えをいただいた多くの先生方、研究仲間たちに深く感謝いたします。家森先生、杉浦先生、荒木先生、町田先生、McEntire博士、大谷博士、高橋博士、Christon博士をはじめとする尊敬すべき研究者の熱意あるご指導やあたたかい励ましのおかげで、ここまで研究を続けてくることがで



きました。また、共同研究者として惜しみなく広範な知識や貴重なデータを提供くださり、解析結果の解釈や議論にも辛抱強く付き合ってくださいました40余名もの論文共著者の方々からのご協力があってこそその研究成果だと思っております。加えて学会や研究会などでは、多くの優秀な研究者から、とりわけ地磁気脈動をご専門とされる先生方から、深い洞察力に基づく含蓄のあるコメントをいただいております。これまで私に関わってくださった本当に多くの皆様に改めまして深く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

今回、受賞題目として挙げていただいた「ウェーブレット関数を用いたPi2脈動の自動検出手法の開発とその応用研究」は、博士課程の半ばから始めた研究です。もともと、地球の磁場がある決まった周期を持って変動するという事実に驚きと不思議さを感じていたため、当初は、Pc4-5地磁気脈動とそれに伴う粒子加速などの現象を人工衛星や地上の磁場データを用いて解析していました。しかし、その当時、Pi2地磁気脈動の励起機構について新たな側面を報告する衛星観測結果が出版されつつあり、この脈動に徐々に興味を惹かれるようになりました。この脈動に関する研究の歴史は1960年ごろまで遡ることができますが、それが持つ減衰波形という性質のために、波動の研究でよく用いられるフーリエ解析(FFT解析)があまり有効ではなく、客観的なイベント選択手法がそれほど確立されていなかったのはやや驚きでした。統計解析を行うためにどのような選択手法を採用しようかと考えていたときに、指導教官の家森先生からウェーブレット解析を紹介していただいたのがこの研究の発端です。ウェーブレット解析は、1990年前後に数学的な整理が成されたところであり、漸くいろいろな分野で応用が試み始められた段階であったため限られた文献しかありませんでしたが、勉強していくうちにどうやら使えそうだという感触を得ました。プログラムを作成して地磁気データを解析してみると、うまく周波数と時間を分離できて、計算機が自動的にPi2脈動の発生時刻を表示してくれました。日付も変わったばかりの深夜の誰もいない部屋での出来事でしたが、そのときの喜びは鮮明に覚えています。こうして選びだしたPi2脈動の統計解析の結果から、特に昼半球で起こるイベントについて新しい事実を見つけることができました。また、折しも地磁気世界資料解析センターでは、京都府北部の峰山町に観測所を立

ち上げようとしているところであったため、そこで観測した地磁気データにプログラムを適用し、自動検出結果をリアルタイムで公開するシステムを構築することになりました。今でこそ、常時接続によるリアルタイムデータの転送などは当たり前のようになっていますが、当時は遠隔地ではダイヤルアップで接続するしかなく、通信の設定、データ処理系統の設計、磁力計の設置など、エキスパートの先生方に教わりながら観測や通信の実地を体験できたのは大きな財産になっています。その後、イギリス・ヨーク大学のMilling博士、Orr博士の協力を得て、同様のシステムをヨーク観測所に構築していただけることになりました。これは私にとって初めての国際協力の体験であり、その重要性や面白さを感じる事ができた非常に貴重な機会でした。この体験は、現在の自動検出システムに関して、イギリス・ランカスター大学、ドイツ・フルステンフェルドブルック観測所、日本・柿岡観測所、アメリカ・APL、メキシコ・テオロユカン観測所の研究者達との協力関係を築くのに役立ちました。

学位取得後は、ポスドクとしてAPLで3年弱の研究生活を送ることになりました。ここでは、高エネルギー粒子データの解析が課題でした。これまで磁場データを中心に研究してきた私は、高エネルギー粒子データの示していることが全く理解できずに相当な苦勞をしましたが、丹念にデータを眺め、いろいろと勉強していくうちに、電離層起源重イオンという大変重要で興味ある研究対象を見出すことができました。これは現在でも大きな興味を持って継続している研究課題であり、研究の幅が広がった点や場と粒子の両者の解析経験を得られた点で苦勞の甲斐があったと思っております。また、アメリカの研究習慣や研究システムにも最初は戸惑いましたが、日米それぞれの利点を理解することができ、その後の研究姿勢に大きな影響を受けました。

こうして自分の研究過程を振り返ってみますと、これ以上はないほど幸運な出会いと恵まれた環境の下にいたことを実感させられます。これまでに多くの方々から多くの貴重なものをいただいて参りました。今回の受賞は、それを再認識してより一層精進するようにとの激励であると受け止めています。微力ながらもこの分野の発展に寄与できる形で研究を進め、ご恩返しができるように努力していく所存ですので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の受賞に際しまし

て、ご自身の貴重な研究時間を割いてまで推薦・選考にあたっていただいた先生方に深く感謝いたします。また、私事で恐縮ですが、大学院生時代からの研究活動に理解を示してくれた両親・兄弟やポストク時代から現在に至るまでさまざまな面で支えてきてくれた妻にも感謝の意を表したいと思います。

大林奨励賞を受賞して

名古屋大学太陽地球環境研究所 三好由純

このたびは、大林奨励賞という荣誉ある賞をいただき、たいへん光栄に存じております。喜びと同時に身の引きしめる思いを感じているところです。これまでお世話になり、そして励ましていただいているみなさまに心よりお礼申し上げます。特に学部時代以来よりご薫陶をいただいている東北大学の森岡昭先生、米国のV. Jordanova先生、名古屋大学の上出洋介先生をはじめ、多くの方々に教えを頂き深く感謝しております。

私は、これまで惑星高エネルギー粒子の輸送・加速過程を中心に研究を行ってきました。修士課程の木星シンクロトロン放射の研究では、木星シンクロトロン放射の観測から木星放射線帯のダイナミクスをリモートセンシングするというので、当時その存在が否定されていた数日程度の時間変動を検出することに取り組みました。電波の放射強度自体が微弱なことに加え変動量が数%しかないため、その検出・同定にはずいぶんと時間がかかりましたが、誤差解析も含めてその存在を示すことができました。また、この変動を説明するために、木星放射線帯での粒子輸送モデルを考え、数値実験によって検証しました。私たちが論文をまとめた

当時、依然として短期変動の存在を疑問視する向きもあったようですが、その後米国のグループによって、よりたくさんの観測例が示されるようになり、現在ではこの時間スケールの変動が同定されています。

一方、私が博士課程に進学した当時、地球放射線帯の研究は大きな変革期を迎えつつありました。古典断熱理論だけでは観測が説明できず、それ以外のプロセスを考えるべきではないかという議論が、ちょうど始まりだしたころです。あけぼの衛星をはじめとする観測データの解析や、数値計算を通して、プラズマ波動による非断熱加速が放射線帯の加速に重要という結論をだしました。いまでは、波動による非断熱加速過程も放射線帯形成の重要なプロセスとして認識されていますが、博士論文をまとめた当時は、学界の中ではまだまだ受け入れられておらず、国際学会でも何度も厳しいコメントをいただきました。このとき、通信総合研究所（当時）の小原隆博先生には研究上の議論だけではなく、いろいろとお励ましをいただき、大変感謝しております。

名古屋大学に赴任してからは、関 華奈子さんや片岡龍峰さんをはじめとする同年代の方たちや、専門の異なる方たちがいっしょにいる環境で研究を続けています。議論を通じて、新しい考え方や方法論にふれることができ、たくさんの刺激を受けながら研究を進められることにとっても感謝しています。これまでの研究を通して、観測された現象を理解していくために、データの解析と同時に数値実験を行うことそして両者を比較・検討していくことの重要性をたびたび認識しました。観測データとシミュレーションを比べるということの方法論についての試行錯誤を続けているのが実情ですが、より深い理解が得られるように努力したいと思いません。

今回の受賞は、「これからもしっかりとがんばりなさい」という励ましであると思しますので、自分の専門をより深めるとともに視野を広くして、よい研究ができるよう元気にがんばりたいと思います。また、現在検討が進んでいるERG衛星をはじめ、これからの計画の実現のためにも力を尽くしたいと思います。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



大林奨励賞の推薦について

大林奨励賞候補者推薦委員会

今年度の応募締め切りは、2007年1月31日です。

1. 内容：本学会若手会員の中で独創的な成果を出し、さらに将来における発展が充分期待できる研究を推進している者に、賞状及びメダルを授与する。
2. 推薦資格：本学会会員（及び大林奨励賞候補者推薦委員会委員）
3. 対象候補者：本学会若手会員（若手会員とは当該年度初めに、原則として35才以下の会員をいう）の中、地球電磁気学、超高層物理学、及び地球惑星圏科学において、独創的な成果を出し、さらに将来における発展が充分期待できる研究を推進している者。
4. 必要書類：以下の(1)から(8)の項目を記載した推薦書1部
 - (1) 推薦者氏名（自署・印）
 - (2) 候補者氏名，生年月日
 - (3) 候補者所属機関・部局・職
 - (4) 学位論文名
 - (5) 学位取得年
 - (6) 審査対象論文名（3編以内，コピー各1部添付）
 - (7) 審査対象論文に対する評価（それぞれの論文について400字以内）
 - (8) 候補者の研究が学会、研究分野に果たす貢献、及び候補者の研究の将来性（400字以内）

5. 送り先：大林奨励賞候補者推薦委員会委員長
渡部重十

〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
e-mail：shw@ep.sci.hokudai.ac.jp
TEL：011-706-2757、FAX：011-706-2760

第120回講演会学生発表賞 （オーロラメダル）報告

講演会における学生による発表を3つの分野に分けて審査を行い、学生発表賞を選定しました。第1分野は地磁気・古地磁気・岩石磁気と地球・惑星内部電磁気の2セッションからなり、

14件の発表、第2分野は大気圏・電離圏と惑星圏の2セッションからなり、49件の発表、第3分野は磁気圏、太陽圏、宇宙プラズマ理論・シミュレーション、宇宙天気・宇宙気候、ジオスペース研究、地球惑星磁気圏探査の6セッションからなり、76件の発表がありました。これら合計139件の学生発表に対し、第1分野2名、第2分野4名、第3分野5名の合計11名の審査員が審査を行いました。審査員は以下の各会員の方々です（敬称略）。

第1分野：清水久芳（東京大学）、行武 毅

第2分野：岩上直幹（東京大学）、田口 真
（国立極地研究所）、丸山 隆（情報通信研究機構）、山本 衛（京都大学）

第3分野：臼井英之（京都大学）、徳丸宗利（名古屋大学）、能勢正仁（京都大学）、三好由純（名古屋大学）、吉川顕正（九州大学）

講演会期間中に時間と労力を大変に必要とする審査作業を行って下さり、公平、公正な選考をして下さった審査員の方々に心より御礼申し上げます。

審査の結果、本年のSGEPSS学生発表賞オーロラメダルの受賞者は以下の9名の方々に決まりました。

第1分野

臼井洋一君（東北大学）A004-P004

「Exsolved magnetite in plagioclase in granites: significance for magnetic fabric and paleomagnetism」

第2分野

亀田真吾君（東京大学）B009-P004「水星大気ナトリウムの密度分布の時間変化」

永田 肇君（京都大学）B005-03「EAR・95GHz雲レーダーによる熱帯上部対流圏の巻雲観測」

村上尚美さん（京都大学）B005-24「衛星搭載加速度計データを用いた熱圏中性大気密度変動と電離大気密度変動の比較」

第3分野

岡崎良孝君（東北大学）B007-05「CIRによって生じる銀河宇宙線低密度領域のモデリング」

小野友督さん（京都大学）B006-P002「Mass-dependent Ion Acceleration in the Plasma Sheet at Storm-time and Non-storm-time Substorms」

加藤 真理子さん(東京工業大学) B008-19
「磁気回転不安定性の不均一な成長による
原始惑星系円盤回転速度分布の変形」
佐藤創我君(北海道大学) B006-P018「極域電
離圏上部におけるイオン上昇流の観測」
永田大祐君(京都大学) B006-06「近地球プラ
ズマシート数密度の太陽風依存」

受賞者には来年度の春の総会において賞状、
オーロラメダル及び副賞が授与される予定で
す。受賞者以外の発表への講評も含めた、審査
員による詳しい講評が分野毎に作成されていま
すので以下のページをご参照ください。

[http://www.sgepss.org/sgepss/history/
students.html](http://www.sgepss.org/sgepss/history/students.html)

(学生発表賞事務局・齊藤昭則)

IAGA小委員会報告

国際地球電磁気・超高層物理学協会
(International Association of Geomagnetism
and Aeronomy; IAGA)は、国際協力を通して地
球電磁気学・超高層大気物理学の発展を促進す
ることを使命としている。(1)このIAGAと連携し
た国際的および国内的な地球電磁気学・超高層大
気物理学の振興、普及および社会貢献に関する事
項、(2)IAGAに関する役員等の推薦、国際会議
等への代表の派遣、国際会議等の日本への招致に
関する事項を審議するため、日本学術会議地球惑
星科学委員会国際対応分科会内にIAGA小委員会が
設置された。いうまでもなく、学問分野的にIAGA
は本SGEPSSと直接対応している国際組織であり、
この小委員会が日本を代表する国内委員会の役割
を担う。小委員会のメンバーは次の通りである。

上出洋介 名古屋大学太陽地球環境研究所・教授
家森俊彦 京都大学大学院理学研究科・教授
歌田久司 東京大学地震研究所・教授
山崎俊嗣 産業技術総合研究所地質情報研究部
門・グループ長
山本 衛 京都大学生存圏研究所・助教授
藤本正樹 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本
部・教授
小島正宜 名古屋大学太陽地球環境研究所・教授
藤井郁子 気象庁地磁気観測所・主任研究官

IAGA小委員会は、11月4日第1回委員会を開
催し、委員長に上出洋介、幹事に家森俊彦、およ
びChief Delegate for IUGG2007には歌田久司

の各委員を選出した。これからの活動として、
2003-2006の我が国におけるActivity Reportの
作成、Working GroupをもたないDivisions III
およびIVに、その設置を日本から提案をする可
能性について意見を交換した。また、IAGA活動
に関する様々な情報を国内関係者に周知する方
法の一案として、e-ニュースレターの発行が提
案された。(IAGA小委員会委員長 上出洋介)

日本学術会議電気電子工学 委員会URSI分科会報告

国際電波科学連合(URSI)に対応する国内組
織として、日本学術会議電気電子工学委員会
のもとにURSI分科会が組織され、その第1回が平
成18年3月6日、第2回が平成18年8月3日に開催
されました。URSI分科会は、電気電子工学委員
会の今井秀樹会員と青山友紀会員を中心に、13
名の特任連携会員が任命され、委員長を松本
紘、幹事を大村善治、多氣昌生、小林一哉の3名
が務めることになりました。さらに、このURSI
分科会の下に、URSIを構成する各Commissionに
対応する10の小委員会が設けられ、各小委員
会は20名から30名の委員から構成されます。各小
委員会委員の任期は、平成20年9月30日とな
り、会長名で発令されています。本学会の研究
分野と密接に関連するCommission GおよびHに
対応する電離圏電波伝搬小委員会(G委員会:
委員長 丸山 隆)およびプラズマ波動小委員会
(H委員会:委員長 岡田 敏美)には、本学
会の会員の方々が多数任命されています。最近
のURSI Councilの動きとしては、Commission G
から提出された"Establishment of Coherent
Backscatter Radar in Siberia"に関する URSI
Position Statementについて承認され、また宇
宙太陽発電所(SPS)に関する白書の加筆訂正作
業が進められています。URSI分科会において
は、2007年9月にオーストラリアで開催される
AP-RASC'07会議の各セッション構成についても
検討がなされています。

(URSI分科会幹事 大村善治)

STPP小委員会と IHY国内委員会の活動報告

1) 日本学術会議地球惑星科学委員会国際対応分科会 STPP (太陽地球系物理学国際共同計画) 小委員会 について

日本学術会議に諮った結果、地球惑星科学委員会の国際対応分科会にSTPP (太陽地球系物理学国際共同計画) 小委員会が設置された(平成18年6月)。同小委員会の設置目的は「太陽地球系物理学(Solar Terrestrial Physics: STP) に関わる国際共同研究計画を継続的に対処し、特定の国際委員会に属さない国際STP研究計画などに対して国内対応を行い、俯瞰的な見地から他の国際STP研究計画と協働すること」とされ、当面の活動としてIHY関連の国際・国内対応を重点的に行うこととなった。従って、公式にはSTPP小委員会が日本を代表するIHY対応組織となる。

STPP小委員会メンバー

委員長

湯元清文(九州大学宙空環境研究センター)

委員

小島正宜(名古屋大学太陽地球環境研究所)

桜井 隆(自然科学研究機構・国立天文台)

小杉健郎(宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部)

柴田一成(京都大学大学院理学研究科附属天文台)

亘 慎一(情報通信研究機構・宇宙環境計測グループ)

佐藤夏雄(情報・システム研究機構・国立極地研究所)

家森俊彦(京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター)

小野高幸(東北大学大学院理学研究科)

渡部重十(北海道大学大学院理学研究科)

2) 国際太陽系観測年(IHY)について

IHYの概要

海洋から大気、地球近傍の惑星間空間までも含む「地球」の研究を全世界的に推進するため、国連の支援のもと66ヶ国、約6万人の科学者が参加して1957-58年に国際地球観測年(International Geophysical Year: IGY)という国際共同研究が実施された。IGYでは、当時始まったばかりの、ロケット、人

工衛星を使った観測が大きな役割を果たした。IGYから50年をへて人類の知識は大きく広がり、地上の観測網の発展は言うに及ばず、探査機が太陽系の果てまでも飛ぶ時代となった。2007-08年に設定された国際太陽系観測年(International Heliophysical Year: IHY) は、この好機をとらえて、地球とそれを含む「太陽系」の研究をさらに発展させようという国際共同研究である。

IHYの目的

(1) 太陽系で起こっている現象の基礎的な物理過程について理解を進める。

(2) これまでの国際的な研究活動をさらに進めるとともに、国際地球観測年(IGY)から受け継いだ共同研究の伝統をさらに発展させる。

(3) 宇宙物理や地球物理の面白さや重要性を全世界の人々に伝える。

特に、(2)で発展途上国での科学研究の振興と、(3)で一般社会への教育普及を強調していることはIGYにはなかった特徴である。

国際組織

国際運営委員会(International Steering Committee)

委員長: Joseph M. Davila (アメリカNASAゴダード宇宙センター)

委員: 小島正宜

国際諮問委員会

委員長: Roger M. Bonnet (欧州宇宙機関)

委員: 小杉健郎

事務局: アメリカ地球物理学会連合(American Geophysical Union)

地域コーディネーター

アジア太平洋地域代表 Wang Chi (王赤) (中国科学院)

IHY日本国内実行委員会(平成18年1月)

委員長: 湯元清文

委員: 柴田一成、桜井 隆、小島正宜、亘 慎一(教育普及担当者)

日本版IHYホームページ

(<http://www2.nict.go.jp/y/y223/sept/IHY/IHY.html>)

IHYに関係する日本の主な活動（地理的に西から東へ）

- (a) 九州大学宙空環境研究センターのMAGDAS (MAGnetic Data Acquisition System)。データをリアルタイムに収集・解析。IHY期間に発展途上国への磁力計を展開。
- (b) 京都大学理学研究科附属天文台の高解像度望遠鏡による太陽観測。また、太陽のフレア爆発を監視する小型望遠鏡を世界各地に展開。
- (c) 名古屋大学太陽地球環境研究所の電波観測装置での惑星間シンチレーション観測。世界各国のIPS装置や、NASAのSolar Mass Ejection Imager (SMEI) 衛星との協同研究。
- (d) 信州大学理学部では、ミュオン宇宙線を全世界に展開した検出器ネットワークで観測。
- (e) 情報通信研究機構の「国際宇宙環境サービスネットワーク」活動。さらに一般への広報普及活動を行う。
- (f) 国立天文台では、可視光や電波望遠鏡による太陽面観測。インドネシア、ナイジェリア、ペルーの研究教育機関に観測装置の提供や技術者を派遣する天文学振興支援活動も行う。
- (g) 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部、国立天文台により、今年9月に打ち上げられた「ひので」衛星による観測は、IHYへの我が国の大きな貢献である。

国際連合が主催するIHY国際シンポジウム

第15回国際連合・欧州宇宙機関

基礎宇宙科学ワークショップ

平成19年6月11日～15日（東京、オリンピック記念青少年総合センター、国立天文台主催）

註）基礎宇宙科学ワークショップ（Basic Space Science Workshop）は、国際連合と欧州宇宙機関が常置主催組織として、その都度開催引き受け国を決めて開催するワークショップで、1991年にインドで第1回が開かれ、ほぼ毎年開催されてきた。天文学や宇宙科学研究に関する最新動向の発表のみならず、発展途上国における科学の普及と振興が大きな柱となっている。このワークショップ・シリーズでも、第13回の会合よりIHYを一つの柱として位置づけている。

IHYに関係する日本の他の活動

(<http://www2.nict.go.jp/y/y223/sept/IHY/IHY.html>)

(1)IHY Gold Clubへの推薦

これまで、前田嘉一、杉浦正久、若井登、前田 坦の4氏が推薦され、ゴールドクラブに入られました。以下の3条件を満たせば、IGY Gold Club Memberになることができます。

条件1) IGYに参加したこと

条件2) 記念物(IGYの写真、当時の思い出や手紙、作文)をIHYに提出すること

条件3) 提出した記念物が公開されることに同意すること

身近な方を推薦されたい方は、IHY日本国内実行委員会までご推薦ください。

(2)2007年日本地球惑星科学連合大会での特別セッション「IGY+50 過去から未来へ」の企画

IGY50周年にちなみ、国際太陽系観測年(IHY)、国際デジタル地球年(eGY)、国際極年(IPY2007-2008)、国際惑星地球年(IYPE)など各プロジェクトの目指しているもの(国際、国内)の紹介、それに沿った各(国内)活動の成果、途中経過の報告、あるいは現在も研究中の特定のテーマに関しての50年間の進捗のレビューなど、招待講演を主とするセッションを実施する。また、歴史的展示物の展示公開を企画する。

(STPP小委員会委員長 湯元清文)

アウトリーチ部会報告

アウトリーチ部会では、11月4日から開催された秋学会（第120回総会・講演会）に合わせまして、恒例の記者発表とアウトリーチイベントを開催致しました。また、本学会が主催団体のひとつとなっております、衛星設計コンテストの最終審査会が10月29日に行われました。

【記者発表】

例年通り、秋学会の発表論文から5編を選出し、学会前日の11月3日（金）13時00分から15時00分に国立極地研究所において記者発表を開きました。選出プロセスは、(1)セッションコンピナーによる論文推薦、(2)アウトリーチ部会での参考意見の集約、(3)会長による論文選考、(4) 著者承諾となり、学問的重要度とともに、

社会的側面やニュース性なども考慮されています。休日にもかかわらず、7社8名のメディアの方にお集まりいただきました。著者自身による工夫された発表は大変好評で、複数の研究発表がのべ6件の記事として紹介されました。開催にあたり、国立極地研究所の岡田雅樹会員と、部会の片岡龍峰、寺田直樹の両会員に大変お世話になりました。

[第3回アウトリーチイベント]

学会初日11月4日(土)の14時から16時に、相模原市博物館におきまして、アウトリーチイベント「極限の世界からの贈り物 オーロラ～南極・北極インターネット生中継～」を開催しました。坂野井和代・健会員による講演会に続き、南極および北極インターネット中継、質問コーナー「教えて!はかせコーナー」、「展示ブース」の各コーナーで、多数の小学生を含む180名余りの参加者に楽しんでいただきました。本企画の実施にあたり、以下の方を初めとする多くの会員や機関にご協力いただきました(敬称略)。山内正敏、二穴嘉文(スウェーデン・キルナ)、尾崎隊員(南極・昭和基地)、中村匡(司会)、国立極地研究所、メディア教育開発センター、愛媛大学総合情報メディアセンター、相模原市立博物館・相模原市、宇宙科学研究本部、はかせの方々(坂野井健、坂野井和代、畠山唯達、佐藤光輝、山本真行、今村 剛、中村 匡、久保雅仁)、NICT、ISAS/れいめいチーム、ISAS/Planet-Cチーム、JAMSTEC、JAXA/ISAS、名古屋大学STE研、九州大学、部会・LOCスタッフ(村田健史、山本真行、山崎敦、二穴喜文、岡田雅樹、中村匡、松岡彩子、今村剛、篠原学、長妻努、加藤雄人、土屋史紀、他アウトリーチ部会メンバー)



[衛星設計コンテスト]

本学会が主催に加わって3回目になる衛星設計コンテストの最終審査会が、10月29日(日)に都立産業工業高等専門学校において開催されました。地球電磁気・地球惑星圏学会賞には大阪府立大学チームが選ばれ、賞状とトロフィーが贈られました。本コンテストの運営に当たっては、審査委員として藤本正樹会員、企画委員として細川敬祐会員にご協力いただいています。

アウトリーチ部会では、今後、1)講師派遣システムの改訂および改善、2)webでの研究分野紹介の改訂、3)連合大会でのイベント・記者発表の検討、4)記者レクチャーの検討、などを進めて参ります。多くの会員の方の部会参加をお待ちしています。興味のある方は、高橋(yukihiro@pat.geophys.tohoku.ac.jp)までお問い合わせ下さい。(高橋幸弘)

男女共同参画提言WG報告

男女共同参画学協会連絡会の活動

- ・今年で二回目となる「平成18年度女子高校生夏の学校」(8月17日～19日:独立行政法人国立女性教育会館(NWEC))が定員(100名)を超える女子高校生を迎えて開催された。SGEPSSは後援学会として企画の立案や運営に協力すると共に、齋藤実穂会員による「学生からのメッセージ」講演や、学会のポスター紹介等を実施した。昨年より一日多い二泊三日の企画で、実験実習コーナーやポスターセッションの時間を十分に取り入れ、連絡会の中心的な主催企画に成長した。また、NWECでは、文科省の委託を受け、「女子理系進学支援事業」を7月より開始した。これは、次世代の科学技術を担う研究者・技術者の育成を推進するため、女子生徒の理工系進路選択を支援する啓発事業の企画運営である。SGEPSSでは、情報提供や企画運営に関わっている。今年度は、上記のような女子生徒等を対象とした様々な取組の事例集を作成し、モデルプログラムの作成や全国の関連施設等への普及資料とする。
- ・10月6日に東京大学山上会館にて、第4回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが開催され、200名近い参加者があった。地球惑星科学連合と共同で、合同～連合大会における学会託児室の経緯についてのポスター発表を

行った。(http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/events06_0.html)

- ・第4回のシンポジウムの終了に伴い、幹事学会が日本分子生物学会から生物物理学会に交代し、第5期の体制に移行した。第4期では、第1期から第3期にかけて行われた大規模アンケートの結果や提言を、第3期科学技術基本計画に反映させることができたのが、大きな成果であった。5年目を迎える今期では、さらに具体的な施策を講じる時期と考えられる。

アンケート調査

当WGでは、大学・研究機関における有期限雇用の研究職に関するアンケート調査を実施中である。期限までに約150件の回答が得られ、現在集計・分析作業を実施中である。今年度中に集計・分析結果を報告書としてまとめ、来年度の連合大会で予定されている男女共同参画のユニオンセッションにおいて、結果を発表する予定である。

秋学会の保育室の設置・利用

第120回講演会において、総合学習センター内に保育室を設置した。11月5日の終日、2家族が利用した。利用に当たって、500円/1名/1時間の利用料金で、差額は学会側からのご支援をいただいた。会場の予約等には、LOCの方々のご協力をいただいた。この場をお借りして、御礼申し上げたい。(木戸ゆかり、長妻 努)

国際学術交流事業補助金 受領の報告

京大大学生存圏研究所 上田義勝

この度、本学会の国際学術交流事業の補助をいただき、2006年8月10日から14日にかけてシ



ンガポールにて開催された Asia Oceania Geosciences Society 3rd Annual Meeting (AOGS2006) に参加させて頂きました。貴重な機会を与えて下さった本学会関係者の方々に厚く御礼申し上げ、その成果についてご報告いたします。

AOGSへの参加は今回が初めてでしたが、学会での質の高い発表や議論はとても刺激的であり、大変勉強になりました。今回は、「Preliminary test results of Digital Wave Particle Correlator (DWPC)」というタイトルで口頭形式での発表を行いました。発表では、宇宙空間のプラズマ波動・粒子相互作用を直接観測する為に現在開発を進めている、波動粒子相関計測器についての開発状況を報告させて頂きました。波動粒子相互作用についての研究は、これまでの衛星観測、ロケット観測でもすでに研究されている重要なトピックですが、衛星機上で相互作用を直接観測する計画は、日本では初めての試みであり、次世代の観測衛星の搭載機器の一つとして注目されています。発表では、これまで開発を進めてきた波動粒子相関計測器の設計状況と、計算機シミュレーションによる相関計測器で得られる観測結果についての検討を行いました。発表の際のセッションでは、新規開発となっている様々な観測器についての情報も得ることが出来、またAOGSの各セッションにて、世界各国が現在鋭意計画を進めている将来の惑星探査ミッション等についての進捗状況を伺うことが出来たことは、非常に有意義であり、大変勉強になりました。また、学会会場でのセッションの合間にも、相関計測器に接続する粒子観測器との接続方法、相関を取るために必要な観測処理時間についての検討や、計算機シミュレーションを用いた相関値の検討についての活発な質問やコメントを頂き、今後の開発に向けての大変貴重な情報を頂くことができました。

最後に、今回の国際学術事業により数多くの貴重な経験ができたことに改めて深く感謝し、応募を勧めて下さった諸先生方に心より御礼申し上げます。今後もこの事業が多くの方の若手研究者に活用され、国際会議参加への強力なバックアップとなることを強く希望いたします。



国際学術交流事業補助金 受領の報告

富山県立大学 石坂圭吾

この度、本学会の国際学術交流事業のご援助をいただきまして、2006年7月10日から14日にかけてシンガポールにて開催された Asia Oceania Geosciences Society 3rd Annual Meeting (AOGS2006)へ参加・発表させていただきました。このような貴重な機会を与えて下さいました本学会関係者の方々に厚く御礼申し上げますとともに、その成果について以下に報告させていただきます。

私は、「Investigation of low energy plasma distribution in the magnetosphere using spacecraft potential」というタイトルで口頭発表いたしました。発表ではGeotail衛星観測から得られる衛星電位・電子密度特性に電子温度依存性があることを示し、衛星電位と電子温度を用いることによって $\pm 20\%$ の精度で衛星周辺の電子密度を推定可能であること、また得られた電子密度を用いて、磁気圏内に存在する低エネルギープラズマを調査した結果について報告いたしました。講演終了後、「衛星電位・電子密度特性の電子温度依存性を用いれば、衛星電位とプラズマ波動による電子密度から電子温度が推定できるのでは」との極めて有意義なコメントをいただきました。これにより、できるだけ早く衛星電位の理論的な解析を行い、衛星電位計測からプラズマ物理を議論するためのキーパラメータである電子密度・電子温度を提供し、皆さんの研究にお役に立てていただくという研究目標をたてることができました。

今回、AOGSにて国外での英語による口頭発表

というものを初体験しました。渡航前までは国内での発表とほとんど変わらないだろうという気持ちが強かったのですが、やはり、英語での発表ということもあって、発表前日には原稿を何度も見直し、何とか覚えようと必死になり、シンガポールに到着した日にもかかわらず、宿泊先のホテルで一睡もしないまま、発表当日を迎えてしまいました。このような行動をしたにもかかわらず、講演の際、修正で真っ赤になった原稿を持って話すことになってしまい自分の英語力のなさを痛感いたしました。しかし、研究発表前のこのような経験は修士の時に初めてSGEPSSにおいて口頭発表したとき以来であり、研究発表に臨む緊張感や研究活動をしはじめたころの初心を思い出すことができ、貴重な経験をさせていただきました。

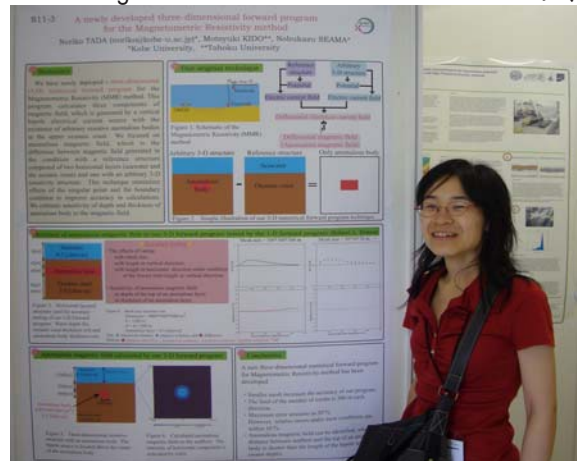
AOGSの各セッションにて、現在計画を進めている将来ミッションの紹介や最新の衛星観測結果の解析などを聞かせていただきました。その際、講演者の方々の質の高い講演や議論を目の当たりにすることができたのは、極めて有意義であり、大変勉強になりました。

最後に、今回の国際学術事業により数多くの貴重な経験ができたことに改めて深く感謝し、応募を勧めて下さった諸先生方に心より御礼申し上げます。今後も本事業が多くの若手研究者に活用され、国際会議参加への強力な支援となることを強く希望いたします。

国際学術交流事業補助金 受領の報告

神戸大学 多田訓子

このたびスペインのEI Vendrellで開催された18th International Workshop on Electromagnetic Induction in the Earthに、



分科会活動報告

宇宙飛翔体環境研究分科会

活動報告

臼井英之、岡田雅樹、中村雅夫、
趙 孟佑、佐々木 進

SGEPSSの国際学術交流事業によるご援助により、2006年9月17日から22日まで参加させていただきました。貴重な機会を与えてくださった本学会関係者の方々に厚く御礼申し上げますとともに、その成果についてここに報告いたします。

私は国際学会には何度か参加したことがありますが、International Workshop on electromagnetic Induction in the Earthには初めて参加することができました。今回私は「A newly developed three-dimensional forward program for the Magnetometric Resistivity method」というタイトルで、ポスター形式での発表をさせていただきました。発表では、コントロールソース法の一つである Magnetometric Resistivity法を使った海洋地殻の浅部比抵抗構造探査の解析に使用する、3次元フォワードプログラムの開発結果についての報告を行いました。

ポスター発表は、予定されていた発表日程に関係なく全日にわたって行われ、毎日コーヒープレイクの時間も含めて熱い議論が行われていました。海洋でコントロールソース法を用いた比抵抗探査を行っているグループは非常に少なく、今回のWorkshopで他のグループと知り合うことができたのは、私にとって非常に大きな収穫でした。他国のコントロールソース法の研究状況や成果を把握することができましたし、私の研究を世界へアピールすることもできました。イギリスのSinha博士をはじめ多くの方に興味を持っていただき、議論を交わすことで、私の研究が世界にも通用することを実感するとともに自信を持つことができました。

また、このWorkshopでは、普段は経験できないInductionに関する中身の濃い議論に加わることができ、非常に勉強になりました。私の研究や考え方に対する視野も以前よりさらに世界へ向けて広がったと思います。そして、国内外を問わず多くの研究者の方々と知り合うすばらしい機会となりました。同年代の他国の友人もでき、よい刺激になっています。

今回の国際学術事業により数多くの貴重な経験ができたことに改めて深く感謝申し上げます。また、現地でお世話になりました本学会会員の皆様にも厚く御礼申し上げます。今後もこの事業が多くの若手研究者への力添えとなることを希望いたします。

本分科会では、宇宙飛翔体環境に関して別々に行われている研究（材料物性工学、推進工学、電気電子工学、宇宙プラズマ物理学、宇宙電波工学など）を互いにつきあわせ、補い合うことにより、飛翔体と宇宙環境との関係を総合的に理解することを目的としています。

本分科会はこれまで7回様々な研究会や国際シンポジウムと連携した形で活動を行ってきました。これらの集約として、2004年度から、JAXA主催「宇宙環境シンポジウム」という枠組みができ、その第1回、第2回が筑波宇宙センターにおいてそれぞれ2004年、2005年の12月に開催されました。今後は、このシンポジウムを宇宙天気研究などの理学分野と材料物性、推進器関連などの工学分野との連携を深める場として盛り上げていきたいと考えています。2006年度の第3回宇宙環境シンポジウムは2006年12月14～15日に開催されます。また、2006年6月に金沢で開催された25th ISTS (International Symposium on Space Technology and Science)にもセッション参加しました。

また、宇宙航空開発研究機構(JAXA)の衛星帯電解析ツール(MUSCAT)開発プロジェクトにも参加しており、宇宙プラズマ環境の提供、粒子シミュレーションによる衛星帯電の厳密解提供の役割を担っています。地球シミュレータプロジェクト「宇宙環境シミュレータ」開発にも協力しています。また、JAXA/JEDI(情報・計算工学センター)において「衛星環境プラズマ数値シミュレータ」の基礎開発にも参画しています。

第2回宇宙環境シンポジウム報告

日時：2005年12月12～13日

場所：宇宙航空研究開発機構 筑波宇宙センター総合開発推進棟1F 大会議室

宇宙環境シンポジウム発起人・委員(敬称略)

五家建夫、松本晴久、古賀清一

(JAXA 総合技術研究本部)

小原隆博(情報通信研究機構)

湯元清文(九州大学)

趙 孟佑 (九州工業大学)
岡田雅樹 (国立極地研究所)
國中 均 (JAXA 宇宙科学研究本部)
白井英之 (京都大学)
中村雅夫 (大阪府立大学)

なお、第3回宇宙環境シンポジウムは2006年12月14～15日に開催予定。

アラスカロケット実験研究会 活動報告

岡田敏美

第120回SGEPSS (2006年11月、相模原市)の期間中、11月5日にB会場にて、第5回アラスカロケット実験研究会を開催した。主な議題は、現在進行中の電離圏中のプラズマ環境計測を目的としたSRP-5(Student Rocket Project No.5)ロケット実験についての現状確認と今後の対応であった。SRP-5ロケット搭載される電離密度と衝突回数を計測する中波帯電波観測装置について富山県立大学より、また、オゾン的高度分布を計測するUV観測機、ロケットの姿勢解析のための太陽光センサーおよび磁力計の開発状況が東海大学より報告された。これらの機器の単体環境試験(振動試験、温度試験等)、机上でのかみ合わせも順調であることが確認された。今後のスケジュールとしては、2007年夏季に搭載機器の総合試験、NASA Wallopsでの環境試験を行い、NASAでの環境試験をパスした後、2008年冬季打ち上げ予定であることがアラスカ大学フェアバンクス校Hawkins教授からメールにて報告された。

つづいて、東海大学にて実施されているハイブリッドロケット実験について報告があり、国内での学生ロケットプロジェクトが拡大している状況が示された。

なお、今後の本研究会の方向については、2008年冬季に打ち上げ予定のSRP-5ロケット実験を成功させるまでは本研究会を継続することが確認された。また、学生の宇宙実験の機会を提供する上で本研究会の役割は非常に大きいので、引き続き本研究会への学生の参加を呼びかけ、国内のハイブリッドロケットを使った実験・観測にも積極的に参加していくことが確認された。

夕方遅くまで参加し、積極的に議論して下さいました皆様にお礼を申し上げます。

古地磁気・岩石磁気研究会 活動報告

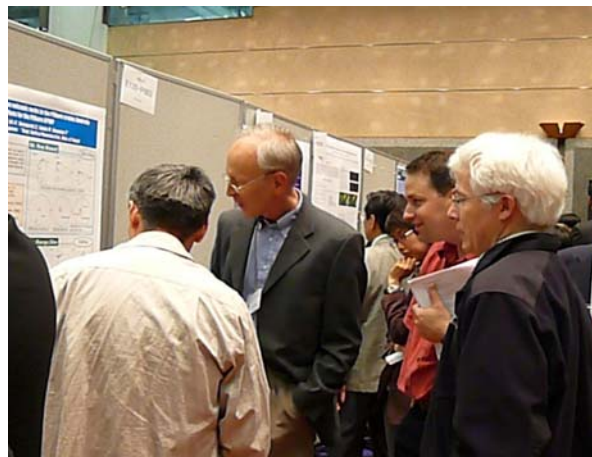
石川尚人

当分科会の活動として、前回報告分以降に以下のことが行われた。

1. 日本地球惑星科学連合2006年大会国際セッション「地球磁場研究の新展開：ダイナモ、古地磁気、岩石磁気」(5/16-17)
2. 古地磁気・岩石磁気研究会(5/16:連合大会、諸項目の打合せと連絡)
3. 「ちきゅう」船上古地磁気・物性計測講習会(6/14-16)
4. 「地磁気・古地磁気・岩石磁気 夏の学校2006」(8/24-26)

連合大会国際セッション「地球磁場研究の新展開：ダイナモ、古地磁気、岩石磁気」

今年5月に開かれた地球惑星科学連合大会に、国際セッション「地球磁場研究の新展開：ダイナモ、古地磁気、岩石磁気」を提案しました。英語のセッション名"Perspectives of Geomagnetism: Geodynamo, Paleomagnetism and Rock Magnetism - tribute to Prof. Masaru Kono"に示されているように、河野先生のご退官を記念したのですが、さらに、その機会を利用して海外の第一線の研究者を集め、日本の研究者、特に若手との交流の機会を設けること、日本で行われているこの分野の研究の進展を世界にアピールすることを目的としました。実際、最近日本で改良・発展させた低温消磁二回加熱ショー法による古地磁気強度測定や、若手の層が比較的厚いダイナモ研究などをアピールできたと思います。また、Prof. John TardunoやProf. Andrew Robertsのような論客による迫力ある(強引な?)講演や議論は、若手の刺激になったものと思います。コンビー



ナーとしては、国際セッションをやるとは言ったものの、講演が集まらず低調なセッションにしかならなかったらどうしよう、という心配もしました。講演申し込みの出足は悪く、はらはらしましたが、いつものように？々切り間際にどっと申し込みがあり、結果としてはコンピナーの予想をはるかに上回わり、口頭発表39件（うち海外から12件）、ポスター発表23件の、2日半にわたるセッションを盛況に行うことができました（うち半日は「物理・天文・地球惑星科学合同プラズマ科学シンポジウム」との共催のダイナモ・セッション）。定員200名の会場は広すぎはしないかと思いましたが、古地磁気分野以外の方々にも関心を持っていただけたようで、ちょうどよい入りでした。海外の参加者からは、よいセッションだったというお褒めの言葉もいただきました。初日の夜にはレセプションが開かれ、交流を深めることができました。この国際セッションを核にしたEPS誌の特集号も企画され、来年春の刊行を目指して現在論文の査読が行われています。

（セッションコンピナー代表：山崎俊嗣）

「ちきゅう」船上古地磁気・物性計測講習会
2006年6月14-16日、地球深部探査船「ちきゅう」の船上（神戸港-大阪港移動航海中）において、「ちきゅう」船上古地磁気・物性計測講習会（第二回若手研究者・技術者のための「ちきゅう」船上実践実習、主催：海洋研究開発機構地球深部探査センター）が開催された。この講習会には、受講生15名（4回生6名、修士課程学生7名、博士課程学生/研究生2名）と講師5名（高知大小玉氏、同志社大林田氏、産総研山崎氏、JAMSTEC金松氏、京都大石川）が参加した。2泊3日間で、(1)古地磁気関連の機器/測定の原理等の講義、(2)堆積物コアからのU-channelとキューブ試料の採取、(3)試料の測定、(4)測定

データの処理/考察、が行われた。併せて、主催者側の海洋研究開発機構地球深部探査センター倉本氏から、「ちきゅう」による科学掘削の概要や掘削技術に関する説明を受け、倉本氏や船上技術者の皆さんの案内のもと、船内の諸設備及び各種船上測定機器の見学が行われた。船上ラボを広々と使わせて頂き、時間的に厳しい実習スケジュールではあったが、有意義なものだったと思う。今後もこのような実際の船上ラボを使つての実習がある事を希望する。

（石川尚人）

「地磁気・古地磁気・岩石磁気 夏の学校 2006」

古地磁気・岩石磁気分科会の今年度の夏の学校は「地磁気・古地磁気・岩石磁気 夏の学校 2006 in 前島」と題して、8月24~26日の3日間、岡山県瀬戸内市の沖に浮かぶ前島で行われた（幹事は岡山理科大学）。参加者は48名（うち学生が24名）で、例年の夏の学校と比べて全体的に若返った印象がある。

「若手研究者にじっくり語っていただく」というテーマのもと、6名の招待講演者（博士課程の学生・若手ポスドクなど）に、学部学生や修士課程の大学院生を対象としてわかりやすく各人の研究分野について語っていただいた。発表分野は、ダイナモ、太古代の古地磁気、テクトニクス、堆積物による環境磁気と地球化学、マントルとコアのカップリングとLOD変動、古地磁気の地質学への応用、と多岐に渡っており、地磁気分野の広がり若手研究者が新しい学問分野しようと強い開拓意欲を感じた。一人の持ち時間が1時間前後ということと、基礎の基礎から話していただくことをお願いしたこともあり、それぞれの発表者の方には自分が絡む最先端の研究の紹介までたどりつく余裕がなく非常に申し訳ないこととなってしまったが、各発表者に非常に



面白そうに話していただいたので、若い学生たちも大いに刺激を受けたのではないかと思います。

他に8本の一般口頭発表があった。ここでは、学会では発表しにくかったこと、学会発表にはまだ到らない、あるいはすでに発表してしまったがもう少し議論したい・伝えておきたいことが披露されたほか、「俺にも教育させろ」という中堅研究者のレクチャーもいただくことができた。また、夜の時間を利用して参加者各人が持ち寄ったポスター紹介があり、参加者同士の交流を深めることもできた。

本分科会では毎年、夏の学校のあり方に関する議論が継続してきている。それは、夏の学校が教育を重視するのか、研究者間の交流を重視するのかということである。どちらの考え方にも一理あり、現在までにこれと言った結論に到っていない。現状ではテーマの選定などは幹事に任されている。今年は極端に前者に偏った構成をとることにした。今回の成果と反省を教訓として、次回以降の夏の学校に役立てていきたい。

また、本年のタイトルに「地磁気」を入れたのも幹事の独断である。これは従来の古地磁気・岩石磁気にとどまらずダイナモなどの地磁気全般における研究者を積極的に取り込んで生きたいという希望でもある。実際、古地磁気・岩石磁気はそれだけで成り立つ分野でなく、また非常に広く応用されている。そのため、現分科会メンバーの研究領域やその他の領域・分野をカバーする学問名を定義することが困難である。さしあたり、共通のキーワードを1つ増やして複雑さを表現してみた。分科会名なども今後の議論の対象としたい。

(2006年夏の学校幹事：畠山唯達)

SGEPSSデータ問題検討分科会 活動報告

石井 守

SGEPSSデータ問題検討分科会の2005～2006年度活動報告を以下の通り行います。

第2回データ問題検討分科会

場所：京都大学百周年時計台記念館C会場
(2F国際交流ホール)

日時：2005年9月28日(水)12:35～13:35

第2回データ問題検討分科会では、愛媛大学村田健史助教授をコンピナとしてSGEPSS分野のデータベース利用についての検討を行っ

た。村田氏の問題提起の後にフリーディスカッションの形式で活発な議論を行った。特に、近年注目されているVO(Virtual Observatory)の国内外の動向を主な議題とし、これを元に今後日本のSTP分野がどのように観測データベースを構築し活用するかについて検討した。

第3回データ問題検討分科会

場所：幕張メッセ101B会場

日時：2006年5月15日(月)12:30～13:30

第3回データ問題検討分科会では、特に今後のデータ流通で利用が期待される衛星利用についての情報提供を中心に検討を行った。気象庁地磁気観測所の小出孝氏からMT-SATのデータ伝送について情報提供、情報通信研究機構石井守より2007年度打ち上げ予定のWINDSの利用についての情報提供があった。これに加えて、第3期科学技術基本計画における地球観測データの位置付け、およびSGEPSSで行われる有期限雇用研究職実態調査への協力の検討を行い了解が得られた。

第4回データ問題検討分科会

場所：相模原産業会館B会場

日時：2006年11月7日(火)12:40～13:40

第4回データ問題検討分科会では、特別講師として国立情報学研究所の北本朝展助教授をお招きし、「デジタル台風：地球科学データと異種データの統合ウェブプラットフォーム」というタイトルで講演を頂いた。特に気象画像データに基づいた知識発見手法、データベース価値向上、可視化等多彩な分野の研究をされてきた北本氏の経歴を踏まえ、大気環境情報の計測情報取得の活動をご紹介頂き、活発な議論を行った。

メーリングリスト上の活動

研究者間の情報交換を目的として、メーリングリストを利用している。登録は手動で行うため、新規加入希望の方は、愛媛大学村田健史(murata@cs.ehime-u.ac.jp)まで電子メールにてご連絡ください。

関連する研究集会

平成17年度 名古屋大学太陽地球環境研究所
研究集会「宇宙地球系情報科学研究会」・
「巨大データベース構築に関する研究集会」
世話人(敬称略)：村田健史(愛媛大)、能勢正仁(京大)、荻野竜樹・阿部文雄(名大)

場所：放送大学・愛媛学習センター（愛媛大
学城北キャンパス内）

日時：平成17年12月15～16日

データ問題検討分科会ホームページ

データ問題検討分科会の活動については、以
下のホームページでも公開している。

[http://www2.nict.go.jp/dk/c216/
Sgepss_data/index.html](http://www2.nict.go.jp/dk/c216/Sgepss_data/index.html)

中間圏・熱圏・電離圏研究会 (略称：MTI研究会) 活動報告

藤原 均、久保田実、斉藤昭則、
大塚雄一、坂野井和代

中間圏・熱圏・電離圏研究は、超高層物理
学、地球電磁気学、気象学、電波工学、あるい
は大気化学と様々な側面からのアプローチが必
要不可欠であることから、様々なバックグラウ
ンドを持つ研究者が相互に交流し、協力しあう
場を作り、より効率的・効果的な研究活動に繋
げることを目的にSGEPSS 分科会「中間圏・熱
圏・電離圏研究会」(MTI研究会)が発足した。

「中間圏・熱圏・電離圏研究会」(MTI研究
会)では、学会等開催時に会合を持ち、国内外
において現在進行中のプロジェクト、研究計画
などについて情報交換を行っている。また、分
科会参加者により同分野の研究集会等の企画・
運営がなされているほか、メーリングリスト上
での情報交換が活発に行われている。以下に、
前回分(平成18年7月)以降の活動を報告する。

第11回MTI研究会集会

場所：相模原市産業会館 B会場

日時：2006年11月5日(日)12:40～13:40



報告事項・話題提供など

- 12:40-12:45 **はじめに**(晩の懇親会の御案内
など)・・藤原 均
- 12:45-12:50 **MTI衛星計画の進行状況**(衛星
名)・・斉藤昭則
- 12:50-12:55 **CPEA国際シンポジウムの御案
内**・・山本 衛
- 12:55-13:00 **PANSYレーダー研究集会の御
案内**・・堤 雅基
- 13:00-13:20 **北海道HFレーダーの状況**・・
小川忠彦・西谷 望
- 13:20-13:30 **NICT-SEALION観測拠点整備
の現状**・・石井 守
- 13:30-13:40 **その他・連絡など**
同日の19:30よりレストランバー・ノーチエに
て懇親会が開催され、約40名の参加があっ
た。左下写真はB会場での分科会の風景。

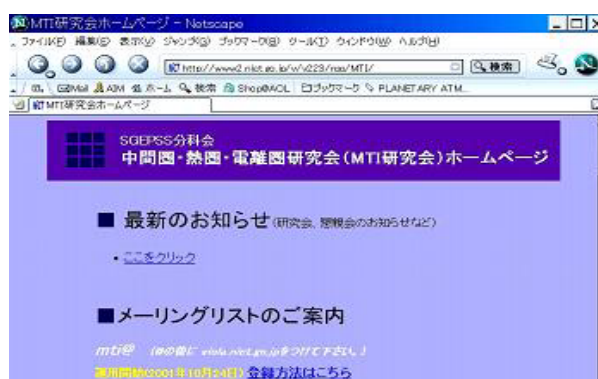
メーリングリスト・webページの活用

情報通信研究機構(NICT)グループの協力のも
と、研究者間の情報交換を目的としたメーリン
グリストが2001年10月24日より開始された。

- ・国内・海外での研究集会参加報告・海外研究
動向報告
- ・MTI関連キャンペーン観測、分科会関係者が主
催する研究会の連絡
などが主な内容であった。

また、MTI研究会の活動・関連情報(研究集会な
ど)は、以下のホームページにて公開されてい
る。

<http://www2.nict.go.jp/y/y223/rpp/MTI/>



MTIメーリングリストへの登録は手動で行う
ため、新規加入希望の方は、久保田 実 氏 (情
報通信研究機構) まで(詳細はMTI研究会ホーム
ページを参照のこと)。

関連する研究集会

平成18年度 名古屋大学太陽地球環境研究所・情報通信研究機構 研究集会

MTI研究会関連の研究集会として「中間圏・熱圏・電離圏(MTI)研究会」が開催された。

世話人(敬称略)：藤原 均、久保田 実、齊藤昭則、大塚雄一、細川敬祐、斎藤 享、小川泰信、吉村玲子、栗原純一、横山竜宏、坂野井和代、津川卓也

場所：豊川市民プラザ

日時：2006年9月25日(月)～26日(火)

関連する集会を統合しようという動きや参加者の利便を考慮し、上記集会は「地上・れいめい同時観測研究集会」「リモートセンシングによる極域電離圏・磁気圏プラズマの動態」「電離圏起源重イオンのダイナミクスに関する研究集会」と連携をはかり、同日及び連続する日、隣接会場での開催となった。

金星の科学分科会活動報告

高橋幸弘、中村正人、渡部重十

本分科会は、2010年の打上に向けて準備が進められている金星探査ミッションPlanet-Cを有意義なものにし、また金星に関わる広範囲な科学を推進するために必要な、情報交換及び戦略策定の場を提供することを目指してスタートした。その目的のために、日本惑星科学会、日本天文学会、日本気象学会で活躍する研究者と連携を計り、分科会連絡組織「金星研究サークル」を設置し共同運営している。学会横断型という性質上、メンバーが集まって研究会を持つことが困難なため、連合大会とホームページの充実を利用して密度の高いミーティングと懇親会を持つことにしている。2006年度も以下のように会合・懇親会を開くことができ、学会を越えた活発な情報交換が行われた。今後本サークルは金星に限定せず、木星など他の惑星にも範囲を広げて活動していく方針について議論された。

第5回金星研究サークルミーティング・懇親会

場所：『Y's 幕張テクノガーデン店』

日時：2006年5月16日(火) 20:00-22:00

参加者：44名(そのうち学生25名)

以下の研究について資料が配布され、討論が交わされた。

1. 金星下層大気における熱潮汐波の振舞い：高木征弘(東大理)
2. 野辺山ミリ波干渉計による金星大気観測：佐川英夫(東大理/ISAS)
3. VCO搭載 中間赤外カメラLIRの開発：田口 真(極地研)
4. VCO搭載 雷・大気光カメラLACの開発：吉田 純・高橋幸弘・上田真也(東北大)、堤 雅基(極地研)、牛尾知雄(阪府大)
5. 欧州の非磁化惑星探査機MEX, VEXで取得されたプラズマデータの解析：二穴喜文(宇宙航空研究開発機構/宇宙科学研究本部)
6. 木星雲対流の数値モデル構築：中島健介(九大)、杉山耕一朗(北大)、小高正嗣(北大)、林 祥介(北大)
7. 木星熱圏・電離圏モデルの開発：埜 千尋(東北大)
8. 惑星リモートセンシング用気球搭載望遠鏡の開発：田口 真(極地研)、吉田和哉・中西洋喜・坂本祐二(東北大・工)、高橋幸弘・坂野井 健(東北大・理)

関連研究集会のご案内

大気化学シンポジウム

大気の化学・輸送過程について最新の研究成果を発表しあい、密度の濃い議論を行うことを目的として、第17回大気化学シンポジウムを開催いたします。2007年度以降、本シンポジウムでの研究発表は地球惑星科学連合の合同学会で行うことになったため、「大気化学シンポジウム」としての開催は今回が最後になります。皆様、奮って発表申込・参加下さいますようお願い申し上げます。

主催：大気化学研究会、名古屋大学太陽地球環境研究所

日程：2007年 1月10日(水)～12日(金)

場所：豊川市民プラザ(PRIO II ビル3階)

TEL: 0533-80-5122, FAX: 0533-80-5125

参加費：参加登録費は無料です。

懇親会：1月11日夜に懇親会を予定しております。(懇親会費有料)

世話人：近藤 豊(東大先端研)、松見 豊、水野 亮(名大太陽研)

連絡先：〒442-8507 豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所 松見研内
大気化学シンポジウム係
TEL: 0533-89-5192, FAX.: 0533-89-5593
E-mail : taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

赤道大気上下結合 国際シンポジウム

赤道大気は大気層間の強い上下結合に特徴がある。我々は1980年代から赤道大気研究に取り組み、2001年には大型の赤道大気レーダー(EAR)をインドネシアの赤道直下に設置、現在はEARを中核設備とする科学研究費補助金(特定領域研究)「赤道大気上下結合(Coupling Processes in the Equatorial Atmosphere; CPEA, 2001~2007年)を実施中である。本シンポジウムは、CPEAの最終期を捉えて、地球規模大気変動に本質的に重要な鍵を握るとされる赤道域大気の下層から超高層に至る力学・電磁力学結合、および様々なスケールの上下結合過程について議論するために計画された。赤道域下層・中層・超高層大気における波動擾乱ならびにこれが惹起す乱流や大循環の作用が、全地球的かつ全高度域にわたる大気圏のエネルギー・運動量・組成成分に及ぼすと予想される様々な影響の素過程を、多角的なアプローチのもとに総合的に理解することは極めて意義が大きい。本シンポジウムへの多数のご参加を歓迎いたします。

主催：科研費(特定領域研究)「赤道大気上下結合」総括班

日程：2007年3月20日~23日

場所：京都大学百周年時計台記念館

事務担当：山本 衛(京都大学生存圏研究所)

詳細は、以下のホームページをご覧ください。

<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/cpea-sympo/> (シンポジウム・ホームページ)

<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/cpea/> (CPEAホームページ)

スプリング・サイエンスキャンプ 2007 参加者募集

サイエンスキャンプは、先進的な研究施設や実験装置等を有する日本各地の大学・公的

研究機関・民間企業(25会場)で、春休みの3日間、本格的な実験・実習が受けられる、高校生のための科学技術体験合宿プログラムです。

今回は、世界最高出力と最高性能を誇る遠赤外分子レーザーがある中部大学先進計測研究センターで、このレーザーを使った実験や、半導体レーザーを用いたテレビ電話工作(光通信実験)を行う「探検しよう!科学技術を支える光の科学 ~マイクロ波から線まで~」(中部大学:3/22~24)。その情報が資源開発や環境問題あるいは防災対策に利用される地質学、今回は仙台市の郊外で地質の調査を行い、地球の理解を深めます「地球の診断 ~仙台市郊外で地質の調査~」(産業技術総合研究所東北センター:3/26~28)。電力会社として取り組むエネルギー問題や環境問題について、講義やバイオマス燃料抽出実験などを通してその重要性を学ぶ「エネルギーと地球環境を考える」(東京電力株式会社:3/27~29)などの25プログラムを実施します。

現在、参加者(高校生)を募集しています。募集要項はWEBサイトから入手可能です。

開催日：2007年3月21日(水・祝)~2007年3月29日(木)の春休み期間中の2泊3日

参加費：10,000円

応募締め切り：2月13日(火)必着

主催：独立行政法人 科学技術振興機構

事務局：サイエンスキャンプ事務局

(財団法人 日本科学技術振興財団内)

TEL: 03-3212-2454 FAX: 03-3212-0014

URL: <http://ppd.jsf.or.jp/camp/>

研究助成等のご案内

山田科学振興財団 2007年度研究援助

会長締切：2007年2月20日(必着)

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する研究者に対して援助を行う。

援助件数：1件100~500万円以内の援助を10件内外

期間：2年を原則とします。

SGEPSSからは2件まで推薦することができるので、以下の書類を上記締切までに会長に郵送

してください。

1. 所定の用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 4部
2. 添付資料
関連主要研究論文リスト(A4版大)4部
上記の論文のうちから選んだ1~3種類の論文の別刷もしくは写し 4部

詳細は、<http://www.yamadazaidan.jp/enjyo2.html>を参照すること。

三菱財団自然科学研究助成 (平成19年度)

締切：2007年2月2日(学会推薦不要)

詳細は、<http://www.mitsubishi-zaidan.jp/>を参照すること。

関連公募のご案内

京大大学生存圏研究所専任教員 募集要項

京大大学生存圏研究所におきましては、下記により教員(教授1名)を募集しますのでご案内いたします。

- 1) 募集人員：教授1名
- 2) 候補者に要請される専門研究領域および職務内容：

生存圏に関わる基礎研究をおこなう中核研究部には3つの研究系「生存圏診断統御研究系」、「生存圏戦略流動研究系」、「生存圏開発創成研究系」が組織されていますが、今回の人事は「生存圏診断統御研究系」を対象とします。とりわけ、生存圏研究所において重要な役割を担う大気圏科学の研究を推進する目的で、以下の研究分野から公募します。

「大気科学、超高層物理学、電磁波応用工学を研究の軸とし、観測、理論あるいは数値シミュレーションなどを駆使して、大気圏環境変動など人類の持続的発展に重要な課題の解決を目指し、隣接する宇宙圏、森林圏、生活圏の研究分野との連携のもと、先端的科学技術研究を推進する分野」

なお、生存圏研究所の研究ミッションの遂行に責任を持って当たって頂くとともに、関連する国内および国際的な共同研究プロジェ

クトを推進して頂きます。さらに、大学附置全国共同利用研究所としての運営に積極的に参加して頂きます。

教育に関しては、現在、当該分野は情報学研究科における協力講座として、学生に対する講義ならびに学位論文研究の指導を担当しています。

- 3) 応募資格：博士の学位を有し、次世代の研究プロジェクトリーダーにふさわしい資質を有する方
- 4) 募集方法：公募
- 5) 任用時期：平成19年4月1日以降のできるだけ早い時期
- 6) 応募書類：
 - (ア) 履歴書(高卒以降、写真貼付、書式自由、連絡先を明記)
 - (イ) 研究業績リスト(原著論文、著書、総説、取得特許、その他)。なお、主要な研究業績10件に印をつけること。すべての原著論文、著書、総説、取得特許の別刷またはコピー(執筆部分)。
 - (ウ) 国際的な活動の実績(国際会議での発表、招待講演、座長経験、海外との共同研究など)
 - (エ) 外部資金の取得状況(最近10年以内)
 - (オ) これまでの国内外の学術活動(3000字以内)
 - (カ) 研究ミッション、全国共同利用への取組を含めた今後の研究・教育の計画、抱負(3000字以内)
 - (キ) 応募者について意見を伺える方(2名)の氏名・所属・連絡先または推薦書(2名)(なお、応募書類は特に申し出のない限り返却しませんので、ご了承下さい)
- 7) 募集期間：平成18年11月13日(月)~平成19年1月31日(水) 正午(必着)
- 8) 書類の提出先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京大大学生存圏研究所担当事務室 気付教授候補者選考委員会宛
(表に「教員応募書類在中」と朱書きし、郵送の場合は簡易書留とすること)
- 9) 問い合わせ先： 京大大学生存圏研究所 生存圏診断統御研究系 教授候補者選考委員会委員長 津田 敏隆
電話：0774-38-3804

E-mail：tsuda@rishi.kyoto-u.ac.jp

参照URL：<http://www.rishi.kyoto-u.ac.jp>

国立極地研究所教員募集要項

このたび、国立極地研究所では下記の要領で教員を公募いたします。

- 1) 職名・公募人員：助手 1名
(注：採用時には助教となる予定)
- 2) 所属：研究教育系・宙空圏研究グループ
- 3) 研究分野：電離圏・熱圏・中層大気物理学、及び関連する分野
- 4) 研究・職務内容：

極域における超高層大気・中層大気の観測、解析ならびに理論的な研究を通じ、宙空圏-大気圏結合の研究の発展に寄与する。国立極地研究所では、今後の南極地域観測の重点プロジェクト研究として、「極域における宙空-大気-海洋圏の相互作用から捉える地球環境システムの研究」を南北両極を包含するバイポーラーの視点で推進することとなった。本公募ではプロジェクトの主要サブテーマの一つである「極域の宙空圏-大気圏結合研究」に密接に繋がった極域における超高層・中層大気の先端的研究を、国内外の共同研究を通して積極的に担う若手教員を募集するものである。また、南極地域観測事業実施の中核機関であり、大学共同利用機関及び総合研究大学院大学基盤機関としての国立極地研究所の役割をよく理解し、南極地域観測事業の推進、共同研究への対応や大学院教育に意欲をもって当ることが求められる。

- 5) 応募資格：博士の学位を取得または本年度中に取得見込みであること。
- 6) 任期：3年間。任期終了時に3年間の実績を評価し、審査結果によっては引き続き3年間の継続が可能。ただし、再任による継続は2回まで(最長任用期間は9年間)。
- 7) 応募締切：平成19年1月15日(月曜日)必着
- 8) 選考・着任時期：応募締切後、選考過程において面接を行うことがある。着任は平成19年4月1日を予定している。
- 9) 提出書類：
 - (1) 応募書 (カバーレターに相当するもので、氏名、学位、所属、職、所属先住所と電話番号、現住所と電話番号、電子メールアドレス、を記載)
 - (2) 履歴書(大学卒業以降の学歴、職歴、賞罰、資格は必ず記載し、顔写真を貼りつける。書式は自由。)

(3) 研究業績目録(学位論文、原著論文、その他、に分類して目録を作成する。それぞれ査読を受けたものと受けていないものを区別する。)

- (4) 主要論文3編以下の別刷りを各1部
- (5) これまでの研究活動の概要(A4版用紙2枚以内とする)
- (6) 今後の研究、教育及び極地観測の発展やプロジェクト研究推進への抱負(A4版用紙2枚以内とする)
- (7) 応募者について意見を聞ける方2名程度の氏名と連絡先
- (8) 推薦書(推薦書がある場合)

10. 応募書類提出先：

〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10
情報・システム研究機構 国立極地研究所
管理部総務課人事係

なお、封筒の表に「宙空圏研究グループ教員応募書類」と朱書きし、郵送の場合は書留とする。

11. 問合せ先：

(1) 研究・職務内容に関すること
国立極地研究所・副所長 佐藤夏雄
電話:03-3962-5874
E-mail: nsato@nipr.ac.jp

(2) 事務手続きに関すること
国立極地研究所 管理部総務課人事係
電話：03-3962-1367
FAX：03-3962-2529

12. 個人情報保護：本募集に関連して提出された個人情報については、選考の目的に限って利用し、選考終了後は、教員として採用された方の情報を除き、全ての個人情報は責任を持って破棄します。

13. 参考：

国立極地研究所、研究教育系・宙空圏研究グループには、現在以下の教員が配置されている。

教授：麻生武彦、佐藤夏雄、山岸久雄
助教授：宮岡 宏、田口 真、門倉 昭、堤雅基

講師：小川泰信、助手：行松 彰、岡田雅樹
また、関連研究分野である気水圏研究グループの大気圏分野には、現在以下の教員が配置されている。

教授：山内 恭、和田 誠

助教授：塩原匡貴

助手：平沢尚彦、橋田 元、森本真司

参照URL：<http://www.nipr.ac.jp>

学会賞・国際交流事業関係 年間スケジュール

積極的な応募・推薦をお願いします。詳細は学会ホームページを参照願います。

賞・事業名	応募・推薦/問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月28日
田中館賞	会長	8月31日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦委員長	1月31日
学生発表賞	推薦なし/問合せは運営委員会	
国際学術交流若手派遣	運営委員会総務	平成19年2月15日 平成19年度は5月上旬、7月中旬 9月中旬、2月中旬を予定
国際学術交流外国人招聘	運営委員会総務	若手派遣と同じ

SGEPSS Calendar

2007-01-17 ~ 1-19	合宿型研究会SSF5: 地上-衛星観測共同研究の深化に向けて (伊良湖ガーデンホテル、愛知県田原市)
2007-02-25 ~ 03-03	8th International School/Symposium for Space Simulations (Kauai, Hawaii, USA)
2007-03-01	International Symposium-Asian Collaboration in IPY (日本学術会議講堂、東京都港区)
2007-03-14 ~ 03-16	CAWSES/IHY workshop (名古屋大学野依記念館、名古屋市千種区)
2007-03-20 ~ 03-23	International Symposium on Coupling Processes in the Equatorial Atmosphere (京都大学百周年時計台記念館、京都市左京区)
2007-04-15 ~ 04-20	EGU General Assembly 2007 (Vienna, Austria)
2007-05-19 ~ 05-24	日本地球惑星科学連合2007年大会 (幕張メッセ 国際会議場、千葉市美浜区)
2007-07-02 ~ 07-13	The XXIV IUGG General Assembly (Perugia, Italy)
2007-07-30 ~ 08-04	AOGS 4th Annual Assembly 2007 (Bangkok, Thailand)

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 本蔵 義守 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学理工学研究科地球惑星科学専攻
TEL: 03-5734-2341 FAX: 03-5734-3537 e-mail: yhonkura@geo.titech.ac.jp

総務 小川 康雄 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学火山流体研究センター
TEL: 03-5734-2639 FAX: 03-5734-2492 e-mail: oga@ksvo.titech.ac.jp

広報 北 和之(会報担当) 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1 茨城大学理学部
TEL: 029-228-8400 FAX: 029-228-8405 e-mail: kita@env.sci.ibaraki.ac.jp
河野英昭(会報担当) 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学理学部地球惑星科学科
TEL: 092-642-2671 FAX: 092-642-2684 e-mail: hkawano@geo.kyushu-u.ac.jp

運営委員会(事務局) 〒107-0052 東京都港区赤坂4-1-32赤坂ビル3階
(株)プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会事務局気付
TEL: 03-3585-8167 FAX: 03-3585-8163 e-mail: sgepss@pac.ne.jp

賛助会員リスト

下記の企業は、本学会の賛助会員として、
地球電磁気学および地球惑星圏科学の発展に貢献されています。

エコー計測器(株)

〒182-0025
東京都調布市多摩川2-3-2
tel. 0424-81-1311
fax. 0424-81-1314
URL <http://www.clock.co.jp/>

NEC東芝スペースシステム(株)

〒224-8555
横浜市都筑区池辺町4035
tel. 045-938-8230
ext: 8-399-2590
fax. 045-938-8324
ext: 8-399-2559
URL <http://www.ntspace.jp/>

クローバテック(株)

〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-1-5
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478
URL <http://www.clovertech.co.jp/>

(有)テラ学術図書出版

〒158-0083
東京都世田谷区奥沢 5-27-19
三青自由ヶ丘ハイム2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

(有)テラテクニカ

〒206-0812
東京都稲城市矢野口 3266-1
ランド式番館
tel. 042-379-2131
fax. 042-370-7100
URL <http://www.tierra.co.jp/>

(株)夏原技研

〒532-0012
大阪市淀川区木川東 3-6-20
第五丸善ビル
tel. 06-6390-8418
fax. 06-6390-8436

日鉄鉱コンサルタント(株)

〒108-0014
東京都港区芝4丁目2-3いすゞ芝ビル5F
tel. 03-6414-2766
fax. 03-6414-2772
URL <http://www.nmconsults.co.jp/>

富士通(株)宇宙システム部

〒261-8588
千葉市美浜区中瀬 1-9-3
富士通システムラボラトリ
tel. 043-299-3247
fax. 043-299-3012
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文(株)営業本部航空宇宙部 計測機器課

〒103-8577
東京都中央区日本橋大伝馬町 8-1
tel. 03-3639-9821
fax. 03-3661-7473
URL <http://www.marubun.co.jp/>

明星電気(株)宇宙機器技術部

〒372-8585
群馬県伊勢崎市長沼町2223
tel. 0270-32-9777
fax. 0270-32-0988
URL <http://www.meisei.co.jp/>